

---

# 逃走する使い魔達

ハムカッタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逃走する使い魔達

### 【NZコード】

N1199R

### 【作者名】

ハムカツタ

### 【あらすじ】

この小説は、ゼロの使い魔のIFものです。ただし、ルイズに召喚された人物達が平行世界間を移動できたり世界改変など帰還可能な人物だつたらという設定で書いています。

IFと銘打ちましたが、実際は少し違うかもしませんし、召喚した使い魔による原作世界での活躍といったものもありません。そういうものが好きな人は見ないほうがいいかもしません。

## 第1話 使い魔は平行世界の扱い手（前書き）

どうも、初めまして。ただ読んだり感想を書くだけでなく小説を投稿しようと思い書いてみました。

文才がないので至らないかもしませんがよろしくお願いします。

## 第1話 使い魔は平行世界の扱い手

ハルケギニアのトリステイン魔法学園。今、この学園では春に行われる進級の条件でもある使い魔召喚の儀式が行われていた。学園から少し離れた使い魔の召喚が行われている草原で爆発が起ころ。

「またかよ、ルイズ。」と使い魔の召喚を行っている学園の生徒から侮蔑を隠そともしな野次が飛ぶ。

「こんどこそ . . . 」とルイズと呼ばれたピンクブロンドの少女がまた使い魔召喚の魔法を行う。

彼女の名は、ルイズ・フランソラ・ズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。トリステインの名門ヴァリエール家の三女である。最も、魔法の才能がなく全ての魔法が爆発へと変わってしまうためゼロのルイズと呼ばれ馬鹿にされている。

ルイズがこんどこそ使い魔を召喚してやるという意気込みで杖を振るつたとき、今までより一際大きい爆発が周囲を揺るがした。誰もがまた失敗かと思ったが、煙が晴れるとそこには . . . 。

「おいおい、ゼロのルイズが平民を召喚したぞ。」とルイズと監督を行っているコルベルを除く周囲の生徒達がざわめく。そう、爆発が晴れた場所にいたのは、ハルケギニアで魔法が使えないために馬鹿にされている平民の老人だったのだ。

最も平民にしては身なりが立派な気がしたが、それだけの話だ。だが、この場所にいる者が誰一人として知らないだけで彼を知る者がいたら馬鹿にするという行動をとりはしないだろう。

老人は、周囲をうががつているようだが、それを尻目に

「ミスター・コルベル！もう一度召喚させて下さい！」

「それはダメだ、ミス・ヴァリエール。春の使い魔召喚は神聖な儀式だ。平民を使い魔にした例はないが、こうなつた以上は彼を使い魔にするしかない。」とコルベルがルイズの懇願を無視する。

落胆したが、平民といえど使い魔は使い魔なのだと気をとりなおし

たルイズは使い魔の召喚を行おうとする。

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから。」といい放ち、手に持った杖を振りながら「我が名はルイズ・フランソワ・ズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！五つの力を司るペントアゴン。この者に祝福を与える、我的使い魔となせ。」と長い詠唱を終え、老人と素早くキスを行う。流石にかつて月世界の王朱いつきを倒した彼といえど、平行世界にいた自分をさらつたにも関わらず、周囲の態度から単純に自分をさらつたのどうか考えあぐねていたためキスをかわすことは出来なかつた。

そして、老人の左上に伝説とされる使い魔のル・ンが刻まれようと・・・しなかつた。通常の魔術師も抗魔力といつて魔力を使った精神干渉や肉体干渉への抵抗力を持つていてのだが魔導元帥の名を冠するこの老人の抗魔力は半端なものではない。それだけでなく、原理が不明なので死亡した存在だと使役できいために解除されかかもしれないがこの老人が死徒と呼ばれるいわゆる吸血鬼で正者とは違つた存在だというのも影響したのかもしれない。

「嘘、使い魔のル・ンが・・・」

ルイズが愕然として呟く。この世界の常識では、使い魔のル・ンは解除不可能な者であり、幻獣にル・ンが効かないとされるのも場合によつては抵抗するために施すのが難しいだけで本質的に、刻めないことはない。

他の生徒達がも先ほどと違い、この事態にざわめく。無論、失敗した可能性もあるのだが失敗＝爆発と結び付いているため、魔法行使がうまくいったかもしれないというのに刻めなかつたのかも知れないのだ。

「ミスター、ミスターは一体・・・。」

コルベ・ルも驚きを感じえなかつたが、この場を監督する教師としてすぐに我にかえり、老人に尋ねる。この場を預かる者としてこの老人を警戒する必要もある。

「ふむ、まずはこの状況が何なのか教えてもらいたいのだが。」

老人が発した声は、本当の意味で威厳を感じさせ聞くものに有無を言わせぬ効果を待つていた。

「はい、私はトリステイン魔法学園の教師を勤めるジャン＝コルベルと申します。」

その声に込められた威厳のあまりに弾かれたようにコルベルが本來なら他に聞くべきことがあると「うう」に、平民と思わしき老人に説明を始める。

ここがハルケギニアのトリステイン魔法学園であること、春の使い魔召喚の儀式のこと、そして老人が使い魔として召喚されたこと…

（平行世界へ移動するには、莫大な魔力が必要だ。この少女が使い魔の召喚で行っているのは、空間転移系統の魔術だろう。おそらく、興味深いが空間転移魔術によって生じた時空の歪みが平行世界へと通じる道を開いたというわけだろう。相性のいい使い間を召喚するとなつてはいるが、聖杯のような検索システムがないものでも思念を元に世界へ干渉するなどをつかえができるが、それでも平行世界に到達する規模ではなく限界がある。耐性のある人間や洗脳効果が先ほどのルーン魔術にあることを考えると實際にはランダムか。）

コルベルの説明を聞きながら素早く老人は思考する。当然ながら、この老人は使い魔として従う気はない。

「ですので、先程はルンは何故か刻まれなかつたようですが、神圣な儀式のためミスターには使い魔として…」

「断らせてもらおう。」

皆まで言わせず老人がきつぱりとことわる。

「ちょっと、あんたさつきといい、あんた何様のつもりよーおとなしく平民は、貴族に従いなさい！」

使い魔を手に入れないければ進級できないのと自分が初めてうまくいった魔法であるため、老人の威厳に萎縮していたルイズがヒステリックに叫ぶ。

だが、それは逆効果にしかならなかつた。ルイズが言い終わると同時に先程の威厳よりも凄まじい威圧が周囲を襲う。

怖い！怖い！怖い！

それは、プライドの高い貴族である生徒を完全に呑み込む効果があつた。逃げろと本能が叫ぶにも関わらずこの威圧のせいで動くことすらままならない。

特に実戦を経験しているコルベールとタバサはこの老人に逆らつてはならないと認識する。

「残念だが、断らせてもらおう。理由は、幾つかある。第一に使い魔のル・ンとやらは使い魔と銘打たれているだけで実質には洗脳を行う精神・肉体干渉系統の魔術だ。最もブロックできるし、ブロックできなくても影響は受けないだろうから大した理由ではない。第二に使い魔となることで、いいように弄ばれるのではないか？

そんなことは、御免だ。

これが、最大の理由だが善悪をどうのといつ氣はないが氣に入らないからだ。」

老人がいいはなつ。

「へ、平民が、貴族に逆らつおうというの。」

ルイズも震えながらも貴族とのプライドからやつとの思いで声に出す。

ルイズの声を聞き流しながら、老人は懐から宝石を刀身とした万華鏡のように煌めく棍棒のような見た目の剣を取り出す。

実は、これはただの剣ではなくこの世界の魔法とは違う遙かな神秘の高みに達した魔法を行う魔術礼装だった。

ルイズ達の見守るなか、老人が剣をふるい、それに伴い周囲が錯覚ではなく現実に歪むように見える。平行世界への移動を行うために大規模な魔力で次元や空間に干渉しているためだ。

ただ歪むように見えるだけでなく、それが見る間に人一人が通れる穴へと拡大する。

すると老人がその穴の中に入り、穴だけでなく老人の姿も消えてい

つた。

「ちょ、待ちなさいよ！」

老人の威圧が消えかかっていたため、ルイズが叫び、その穴へと近づく。

しかし、ルイズが近づく前にその穴が閉じてしまう。

こうしてルイズは、この後も逃走されることになる使い魔召喚の第一回目を終えた。

型月より「キシュア・ゼルレッチ・オ・ゼンシュタインオーグ」を召喚。

## 第1話 使い魔は平行世界の扱い手（後書き）

やはり、意味もなく長いでしょうか？いろいろと指摘して下さい。  
それと、帰還可能な能力を備えているキャラについても詳細なプロ  
ファイルと共に書いてくれれば幸いです。

## 第2話 使い魔は超越者（前書き）

今回は、タイトル通りアニメ・漫画界最強と評されるあるお方が召喚されます。

## 第2話 使い魔は超越者

翌日、トリステイン魔法学園では、再びルイズの使い魔召喚が行われようとしていた。本来なら使い魔の召喚は一度きりなのだが、その後召喚した使い魔に逃げられたことを詳細に学院長のオーラド・オスマンに報告した結果、特例として使い魔の召喚が再度許されることになつたのだ。複数の生徒やコルベールからの報告で逃げた手段が全く未知の魔法やでなければ先住魔法を使われた特異な状況や、何より召喚した使い魔に逃げられたということがばれれば学園全体の名誉の低下や彼女の両親のヴァリエル夫妻の怒りをかいかねない。今回の召喚に立ち会つのは、ルイズ以外にコルベール、ルイズのことを思い参加するゲルマニアからの留学生キュルケと彼女の友達のタバサしかいない。他の生徒がいなのは、もう既に使い魔の召喚を終えていることと、プライドの高いためおぐびにも出さないが前回のような事態に巻き込まれるのを避けるためだ。

そしてルイズがまた召喚を何度も失敗した後にひとりわ大きな爆発が起こる。

おそらく使い魔を召喚したのだろうと前回の経験を踏まえ、煙が晴れるのを待つ。

煙が晴れると、そこには黒の偉く縁が長く丸い黒帽子を被り、それ以外にも全身に黒衣を纏い、肩まで伸ばした長髪の男がいた。（また平民を召喚したの。）

ルイズが望んでいるのは、強力な幻獣を使い魔にするのであり、平民を使い魔にしようとは考えてなどいない。更に脳裏には、前回の使い魔召喚の記憶が甦る。

最も後者は、別として黒衣の男を知っているものならばそのような考えには至らないだろう。ドレジヤツカルの異名を取る高い戦闘能力と残虐さを備えているのだから。何はともあれ召喚した以上は、使い魔のルンを刻まなくてはならない。ルイズは黒衣の男に近づ

くと、素早く杖を振り呪文を詠唱しキスを行った。彼といえども状況の把握を前提にしていたためにキスを受けてしまう。

キスを終えると同時に黒衣の男の左腕が光輝き、使い魔のルンが刻まれていく。

「何をつ、グウ！」流石に平賀才人のようにあけすけに痛がるといふわけではないが、ルンを刻まれることにそれなりに彼といえど痛みを感じるようだ。

（やつた、うまくいったわ！これで私も使い魔を！）

一方、ルイズは黒衣の男にルンを刻まれていく姿を見て一安心する。それは、立ち会つたコルベル達も同様だ。そして使い魔のルンが刻み終わる。

それを見て誰もが、前回のような事態にはならないと思ったが、その期待は裏切られることになる。

ルンが刻み終わると同時に男が何処からともなくナイフにしては小さく細すぎるような気がするがナイフのようなものを取りだしたかと思うと　　「これはメスなのだがメスはこの世界には存在しない

次の瞬間にはルイズの腹部にそれを突き刺す。その間、幾ら近い距離にいたとはいえ誰もその動きをとらえることは全くできなかつた。「ミス・ヴァリエルつ！」

「あんたルイズに何を！」

「・・・・」

コルベルとキュルケが同時に叫び、タバサも何も発することはないうが表情を彼女をよく知る者でも分からぬが変化させる。無論、叫んではいただけではなく杖に同時に手を伸ばそうとするが

「動かないで下さい。」

その動きを黒衣の男が発する氷のように冷たい声が押し止める。あの老人の威圧のように動けない訳ではないが、その声はただ冷たいというだけでなく人の命など男がなんとも思つていないのでと感じさせる。

更に続けて言った「私は、彼女の心臓大動脈の隣を刺しています。

私が少しでも動かしてしまえばそれだけで彼女は死にます。」といふ脅しを発する。

メイジといえど心臓を潰されてしまえば程度と処置にもよるが、平民よりはましとはいえ急所であることに変わりはない。「要求を言つて欲しい。」

男の言葉を聞き、コルベルが発する。

「そんな、先生はルイズが心配じやないんですか！」とキュルケが声を荒げるが、それを「黙るんだ、ミス・ツェルプストー。彼を刺激したらミス・ヴァリエルが死ぬかもしれない！」とコルベルが静かにするようにいう。

それだけでなく実戦経験を持つタバサも下手に刺激しないほうがいい。それを聞きキュルケもしぶしぶではあるが大人しくなる。

「まずここが何処で、何が目的で私を呼び出しかを教えて下さい。そのやりとりが終わるの待ちながら、男が尋ねる。「あ、あなたは私が使い魔として召喚したのよ。あなたは私の使い魔として大人しく従いなさい。」

ルイズが腹部を刺されている状況にも関わらず高圧的に男に命令する。それは、彼女の貴族としてのプライドから発言なのだが、この状況では逆効果にしかならないだろう。幸いにも男はきにしなかつたよう年長者のコルベルに具体的に説明するよう頼む。

前回と同様に説明が行われる。だが完全に前回と同様という訳ではなく、男が使い魔になつたらどうなるのかとといったことを尋ねてくる。「つまり、私は使い魔とやらになるために召喚されたという訳ですか。」説明を聞き終えた男が発する。それと同時に自分がメスを刺している少女の使い魔になるかを思案する。

彼は、結果よりも過程を楽しむタイプだ。相手を殺すことに愉悦を覚えるが、それと同時に強者との戦いを望んでもいる。

その彼からすれば、使い魔になるというのも強者との出会いをもたらすかもしれないため考慮に一応は値する。「そうよ、あなたは私の使い魔なんだから大人しく従いなさい。使い魔のルンだつて刻

んだんだから。」

またルイズが発する。彼女からすれば自分を刺していようがこの男は使い魔であり、自分に従うべき存在だった。それに今はこうでも使い魔に主人に好意をもたらすルンを刻んだ以上は今はこうでもいずれは従う筈だともわざかながらも考えている。

だが、そんな彼女の期待は裏切られる。

「使い魔のルンとやらはこれのことですか。」

そういうつて男が左腕を見せるが、そこには使い魔のルンは存在しなかつた。

「あ、あんた一体何したのよ！ルンが消えるなんて！」

そう、使い魔のルンは一度刻んだら使い魔が死亡しない限りは解除されないというのが、この世界の常識だ。だが、この男の能力からすれば解除は容易い。

この男の能力は、量子力学不確定性原理。限定的な世界改変ともいうべき能力であり、自分のイメージできないことは例え死すらも起こらない。

先ほどルンを刻みこめたのは、ルンを知らなかつたためルンを知つた今ならば能力によりルンを消滅させることが可能だつた。

「何つて普通に消滅させただけですが。」

「あんたそんなことができるわけが」　　ルイズが反論するが、それを遮り男が「使い魔になるかならないかでしたね。その答えですか

」

「お断りさせてもらいましょう。」

そう言い終えると同時にルイズの腹部からメスを引き抜く。メスを引き抜かれた痛みからルイズが地面に倒れる。

それを見たキュルケが怒りのあまり反射的に男に杖をむけ呪文を詠唱しようとすると、腕に激痛が走り杖を落としてしまう。

見ると腕にはいつのまにか三本のメスが走っていた。

「心配しないで下さい、彼女の命に別状はありません。あなた方も

私を刺激して私に殺されずに済むという幸運を失いたくはないでしょう。

より冷たさを増した声で男が言つ。

「強者との出会いを望むのなら彼女に従うのも一興とも思いましたが、あなた方程度のレベルでは不十分だ。」

ここでいうあなた方とは、コルベルとタバサのことだ。コルベルとタバサが実戦経験者であることを男は見抜いていたが、その動きから自分の望むレベルには達してはいないとすぐに分かる。それだけではなく魔法と呼ばれる能力の度合いも原因だ。男が活動している世界にもそういうオカルト絡みの能力は存在しているため、そういう能力を感知することも出来る。だが、感知した力の度合いは極めて小さい。

この程度の能力では意味がない。

「まああなた方より強い相手もいるかもしれませんが、やはり蛮くんと銀一くんほどの興味はありませんね。」

そう男が言い終えると同時に男が一瞬のうちに消えてしまう。あらゆる平行世界・次元を移動可能な超越者たる彼からすれば大したことではない。

Get backer's 奪還屋より「赤屍藏人」を召喚。

## 第2話 使い魔は超越者（後書き）

とゆうわけで赤尻藏人さんが召喚されました。  
量子力学不確定性原理などおかしなところがあつたら指摘して下さい。

### 第3話 使い魔は文殊使い（前書き）

今回は可能な限り、ギャグテイストなように工夫して見ました。

### 第3話 使い魔は文殊使い

前々回、前回とルイズは使い魔に逃走されてしまった為に再び翌日に使い魔の召喚が行われる。ルイズの怪我は黒衣の男の言ひ通り大したものでなく、キュルケの負った傷も同様だ。

複雑なものになれば治療に秘薬が必要とはいえ、単純な裂傷ならば回復魔法として使える水の魔法で瞬時に直せてしまう。

そのため、すぐに彼女たちは復帰し、また使い魔の召喚が行われることになった。

召喚に立ち会う人間も同様だ。

そして最早恒例となつている爆発を終えると同時に使い魔が召喚される。

今度召喚されたのもやはり平民であり、バンダナを額に撒いている少年だ。

「どうや　　ここはーまた美神さんの仕業ですか　　！」

召喚された少年が大声で叫びふざけているとしか思えないようなオバな態度で混乱する。最も態度がオバではあるかもしれないが、朱い月を倒した老人や人を越えた超越者たる黒衣の男とは違ひ当然の反応と言えるかもしれない。

少年は、混乱する頭で何が起きたのか、いや何が起きているのかを必死に考えようとする。

（俺は、普通に除霊事務所の扉を潜つただけだぞ！それなのに何でこんな草原にいるんや　　！いや、またさつきチラッと見えただけだけどあの鏡みたいなものが原因か？

あれが原因でここにいるとしてもこんなことになつたのはやつぱ女神さん絡みなのか、それともまさか最まづいことに・・・）

そこまで考えて少年は、思考をやめる。そこから先は、考えたくもなかつた。今まで少年は、靈力を使えないバイト時代から悪霊や妖怪と戦うGSであるため当然危険なのが、それらを差し引いても

不運や厄介な事態に巻き込まれている。

例えば大気圏に生身に突入したり、雇い主に給料を払つて貰えずに飢え死にしかけたり・・・・それ以外にも知らない間に神様に憑依されて神様の力を利用するために知らない間にこきつかわれたり、除靈のさなかに雇い主に盾にされたりなど不運な目にあつてはいる。その中でも最大の者は、世界の命運を賭けた魔神との戦いでありスパイとして侵入するために全人類から裏切り者扱いされかけ、恋人の元々敵側に属していた虫の魔族を失つたあの戦いであろう。

（まさか、またあんな厄介な目に！やめてくれ　　、俺が一体何したんだ　　！）

一方、ルイズの反応とはいと・・・・

ルイズは、その少年の様子を遠巻きに眺めていた。今までの召喚でただ平民を召喚するだけならまだしもその平民に逃げられ、致命傷でないとはいえ刺されたのだから警戒するのは当然だろ？

だが、（こいつなら大丈夫そうね。見るからに弱そうだし。）

ルイズは、その少年が召喚されて慌ててていることや見るからに弱そうな見かけから大丈夫そうだと判断する。そしてルイズは近づき呪文の詠唱を追え、素早くキスする。

「ちよつ、キスしてくれるのは嬉しいけど一体何をしたんやー！」「

キスが終わると同時に少年が絶叫する。混乱していたのと変質者まがいくというより変質者への女好きであつたことや予想できなかつたことから、そのままキスを受けてしまつたが霊能力者であるためにそのキスに何らかの力がこめられていることに気づいてしまう。それ以外にもいきなり抱きついたりなどの自業自得の面も有るが女性が原因で散々な目にあつたり、以前蛇の元女神族のテロリストにキスされてしまったことが原因で倒した仇敵が復活するといったことも影響していたのかもしない。

その予想は当たり、左腕が輝くと同時に全身に激痛が走る。

「ギヤー、痛つー！痛い！死んじまーー！助けてーー！」

ルーンを刻まれる際の痛みによつて周囲一体を転がりながら痛みを

上げる。もつとも叫んでいてもこれよりも酷い痛みを味あつたことが何度か有るのだが、それでも痛いものは痛い。

「ああもう、うるさいわね！ 静かにしさない！ 使い魔のルーンが刻まれているだけよ！」

その様子を見ながらルイズが何事もないかのように発する。ルイズにとつて使い魔の召喚は、自分の進級がかかっており、さらに自分の評価にもつながる。そして今までの召喚はうまくいかなかつたが、今度の召喚はうまくいくだろうと思つてゐるためだ。

やがて、光も静まりルーンが左腕に刻まれる。激痛が治まつたので少年は、立ち上がつたが、左腕に変な紋様が刻まれていることに気づき、「なんや、これはー！こんなもの腕になかつたぞー」と再び絶叫する。

「それは、使い魔のローンよ！あなたは、私が使い魔として召喚したの。だから大人しく従いなさい！」

111

使い魔にて――――――

少年がルイスに対して何か言おうとするが、途中で言うのをやめ、彼女の後方にあるものに目が吸い寄せられる。それは、ルイズの召喚を見守っていた褐色の肌の巨乳少女、つまりキュルケである。前述したとおり、この少年は変質者まがいの女好きであり、戦闘時にさえも手を出してしまはうほどだ。当然、わけの分からぬ状況とはいえそちらを優先する。

「永遠の愛を誓います！」

キュルケを認識すると同時に、それなりの距離があるにもかかわらず誰の目にも留まらずにそう叫びながら次の瞬間には気づいたらキュルケに抱きついていた。

その場にいた誰もが一瞬黙るが、それから立ち直ると何をされてい

るのかに気づいたキュルケは、素早く少年を投げつける。

「へふつ！」

地面に投げつけられてうめき声を上げる少年。だが、少年の身にはそれすらも超える災厄が降りかかるとしていた。

「はじめまして、私はキュルケ・アウグスタ・フォンフレーリカ・アンハルツ・ツェルプスター。通称、『微熱』のキュルケと呼ばれているわ。」

キュルケがその少年に向けて普段となんら変わりのない口調で発する。だが、それだけに逆に恐ろしさを感じさせる。

「でも、あなたには『微熱』以上の熱を味あわせてあげようかしら。ファイヤー・ボール！」

言い終えると同時に杖からファイヤー・ボールを放つ。彼女は、火系統のメイジを代々排出するゲルマニアの名門ツェルプスター家の子女であり、彼女自身も優秀な火系統のメイジである。放たれたファイヤー・ボールがすさまじい勢いで燃え広がり少年の体を襲う。それだけではなく、「ちょっと、私の使い魔の癖に何ツェルプスターの女何かに手を出してんのよ！」と自身の使い魔が敵対していく仲の悪いツェルプスター家のの人間を襲つたことで怒り心頭のルイズも自分の失敗魔法によって起こる爆発を起こし攻撃する。

「何をするんだ、ミス・ヴァリエール！ミス・ツェルプスター！これでは、彼が死んでしまうぞ！」

それを見ていたコルベールが慌てて叫ぶ。そう、コルベールの言うとおり少年を襲つた炎と爆発の勢いを考えると死んでしまつていてもおかしくない。

「「あつ！」」

二人が同時にそのことに気づき、声を上げる。だが、この後この場にいる全員が驚かされることになる。

少年の体を襲つた炎と爆発の勢いは、確かにすさまじいがそれは極めて瞬間的なものであり、ただちにその勢いが落ち着いていく。そして、少年はとうとそこに全身を炭化したかのように黒こげに覆

われて倒れている。

「誰がも死んでしまったのかと思ったが、『ふう～死ぬかと思った～』と少年が何事もなかつたのかのようにむつくりと起き上がる。この少年の生命力は、ゴキブリ級であり、それだけでなく本来なら完治するのに数ヶ月もかかるような怪我も短期間で治る再生能力も持つているためにこの程度はたいしたことではない。」

「「「化、化け物――！」」「ゆ、幽霊！」

ルイズ、キュルケ、コルベルが叫び、普段冷静なタバサも彼女が恐れている幽霊でないかと思い声を上げる。

「化け物や幽霊って俺は死んでもいないし、化け物でもありますよ！さっきはこちらも悪かつたとはいえたこの状況が何なのか教えて下さい！」

「あっ、ああそうだね。」

（この少年本当に人間か？）とコルベルがこの場にいる誰もが思っている疑問を内心浮かべながら、ひきつった笑顔で説明を始める。「ふざけるな！使い魔として一生仕えないといけないだつて！それも美神さんみたいな巨乳じゃなくこんな貧乳と！」

コルベルの説明を聞き終わつた少年がまたまた叫ぶ。確かにこんな状況では、不適切な言葉が入つてゐるが、一生使い魔と呼ばれる存在となつて仕えるなどと普通は思わないだろう。

「ちょっと、貧乳つてどういうことよ！とにかくあなたは、私の使い魔何だからおとなしく従いなさい！」

使い間のルーンだつて刻んだんだから！

「使い魔のルーンつてこれか？」

そういうながら左腕に刻まれた紋様を見せる。

「そうよ、それがあんたが私の使い魔つて証よ！死なない限りは、解除できなんんだし、あんたみたいな平民にはあの一人のように解除なんて出来ないわ！」

前々回、前回ではルーンが刻まれなかつたり、無理やりルーンが解除されたりしていたのだが、今回はルイズが相手が単なる平民だと

思つて いるので解除できないと思つて いる。ちなみに少年がただ単に戦闘能力に特化しているだけで、ルーンといった能力にも靈能力を使えるGSは耐性を持つて いるものもいるし、ぼけているとはい え天才的な鍊金術匠のよう に魂に施された術を解除するといったこ とも可能な能力者は一応存在して いる。最もこの少年にはそんなこ とは出来は しないし、専門的な知識もない。が、ただし少年の使え る希少な能力を除外すれば だが。

「解除できないなら、無理やり解除してやるまでの話だ。使い魔な んかになつてたまるか ！」

そう言つと少年は、懐からビーダマのよ うなものをいくつか取り出 す。実は、これはただのビーダマではない。

それは文殊と呼ばれる能力であり、歴史的に見ても宗教上の聖人と 呼ばれる人間でしか莫大な靈力を必要とするため使えたものはいな い。その能力は、万能ではないが強制的に靈力量によるとはい文 殊に靈力と文字をこめることで現実世界に文殊にこめた文字を引き 起こすというものである。

そんなもので何が出来るのかと見守つ て いるルイズたちの目の前で 強制解除と文殊に文字をこめると、そのまま文殊をルーンに ある。文殊といつても万能ではなく魔神との戦いで見せたように、文殊に 対し何らかの力で防御できるものなら文殊による力を防御するこ ができる。そのため、ルーンの解除はルーン自身の判断で行つため 解除されたくないルーンの魔力と文殊の靈力とがぶつかり合い、ル ニンを刻み込んだ時と同様に光が発する。

だが、その戦いはルーンではなく文殊が優勢な戦いである。普段の 態度からは、想像できないだろ うが、一応文殊により魔神に対しダメージを与えたこともあるほどであり、文殊自身も靈力量によると はいえ時間移動が可能なポテンシャルを秘めているためだ。

「うおおおー、これでもかー！」

さらに少年が文殊に対し靈力をこめる。それによつて元々優勢だつ た文殊がルーンに対し、一気に優位に立ち文殊がルーンの抵抗を押

し込む。次の瞬間には、ひとりきわ光り輝くルーンが左腕から消えていた。

「ぎやっはっはっは、どうだ！ 見たか！ ルーンなんてものは解除してやつたぜ！ さつきはよくもやつてくれたな、喰らえハンズ・オブ・グローリー！」

少年がルーンを解除したことによつて高笑いすると、同時に自分を使い魔として一方的に従わせようとしたルイズに対し、右腕に剣のようなものを持つと同時に突進する。

この少年は、自分よりも強い相手に対しては、逃げ惑つたりなどといった態度をとるが、弱い相手に対しては調子に乗つてしまつとう悪い癖が有る。もちろん、殺すなどということはないがかなり酷い目に合わすつもりだらう。

「うわっ！」

だが、そつはならず素早く回避したものの少年の体を炎が襲つ。先ほどはキュルケが放つたが、今は放つたのはコルベルである。

「いきなり、何するんやー！ 死んじまうとこだつたぞ！」

「生徒を守るためなら出来るなら多少痛めつけるだけにしたいが、君を殺すことも場合によつては有る。ここは、私に任せて君達は下がりなさい。」 少年が手前がつてなことを言つが、それに返答しながら、ルイズ達に霧囲気の変わつたコルベルが指示する。

彼は、今は魔法学園の教師だが、元々は特殊部隊に在籍していたことがあつた。かつて騙されたとはいえ自身が行つた虐殺が元で、戦闘を忌避しているが生徒を守るためならその力の行使も辞さない。特に以前相対した人物ほどではないが、怪しげな力を使う人物なら尚更だ。少年が手前がつてなことを言つが、それに返答しながら、ルイズ達に霧囲気の変わつたコルベルが指示する。

少年もコルベルの霧囲気が変わつた事を敏感に察知する。  
(ひつ、雑魚ならともかくこんなのと殺つたら死んでしまうやないか！)

その霧囲気に弱い相手には、調子に乗れるが強い相手と分かつたた

めにビビる少年。無論、打開策も編み出そうとしている。

そしつ、少年が取つた選択は

「すいませんでした、もう一度とやらないので許して下さい。」

そう言い残すと、脱兎のごとく走り出す。少年が選択したのは、逃走だった。

ただ走つて逃げるのとは違い、見る間に距離が離れていく。

「待ちなさいよ！！」

それを見て、ルイズが叫ぶが待てと言われて待つ馬鹿はいない。

そして、少年は目で全く捉えることができないところまで到達してしまう。

その後、ルイズの訴えにより、魔法学園の人間によつて周囲が捜索されたが、少年は発見されなかつた。

それもその筈で、文殊を使い、もう既に帰つていたためだ。

GS美神極楽大作戦より「横島忠夫」を召喚。

### 第3話 使い魔は文殊使い（後書き）

やつぱり、ギャグテイストと言つても、ギャグテイストではないでしょうか？

一部文殊の設定で矛盾したところがあるかもしれません、あくまで帰還を前提にしているためです。

## 第4話 使い魔はレベル0

学園都市。その言葉を聞いたら、何を思つだろ。学生の町。あるいは科学研究の盛んな町だろうか。

だが、その学園都市はそれらとは違う。まず規模からして東京西部に位置するが、東京だけでなく埼玉・神奈川・山梨の三都道府県に位置し、総面積は東京都の3分の1におよぶ。

総人口はその8割が学生で、約230万人に達し、インフラも完全に備え実質的な独立国家といえ、事実政治的影響力も大きい。

しかし、その都市の一番の特異性は能力開発を行つてることにあるだろう。能力開発とは、薬物などの手段により量子力学で実証された超能力の開発を学生を対象に行われている。勿論、人体への影響は無害だ。

だからと言つて能力開発を受けたからといって必ずしも、発言するわけではなく個人の資質も重要であり、超能力のレベルは5段階あり、その中にはレベル0「無能力者」と呼ばれる能力を発言していない者もいる。

夜のとばりが訪れている今、家路に向けて疾駆する少年も能力開発を受けているが、システムスキャンの結果能力が発言していないとされている。

少年には、一応特殊な能力が宿つてはいる。だが、今はそんなことは少年には関係なかつた。

（まづい、このままじゃインデックスがどんな目に合わされるか分からね。）

少年は、焦つていた。少年がこんな時間に外にいたのは、補習を受けていたためだが、その結果夕食を作つてはいない。このままでは居候のとある事件で知り合つた腹ペコ大食いスターに何をされるかしたものでない。

そのために急いで帰ろうとしていたために、使い魔召喚の鏡のよう

な門に突つこんでしまった。

「うわわわわ 、何だ ！」

少年が門に突つ込んでしまったために叫び、慌てて目を覆う。

そして、そのまま少年はハルケギニアへ召喚されようと・・・・しなかつた。

少年は、何も起こる様子がないので恐る恐る目を開けてみるが、何も異常はなく先ほどと同じ所にいた。

「今は、何だつたんだ？もしかして、こいつのお陰か？」

そう呟くと、右腕を見る。右腕には、レベル〇である少年にある特殊能力が宿っている。

その名は、幻想殺しヽイマジンブレイカ。超能力とも魔術と呼ばれる一般に公開されていない能力とも違い、それらの異能の力を例え神のシステムでさえ触れることで無効化する。また、触れなくても全身に及び異能の力も無効化でき、その能力によつて彼に恋慕する学園都市最高位の超能力者の一角に属する少女に恋慕する風紀委員の少女の嫉妬から来た空間転移系統の能力による攻撃を防いでいる。

それだけでなく、次元を断裂するカテ ナと呼ばれる剣も防いでいる。

そのため、使い魔召喚の門が全身に効果を及ぼす者も無効化でき、次元に干渉する能力も防げるため無効化されてしまったのだ。

「まさか、インデックスの身に何かが！！」

少年は、あの鏡が居候を狙つたものでないかと考えた。少年の居候は、世界中の魔術師から10万3千冊の魔導書の知識を持っているので、狙われているためだ。

「待つていろよ、インデックス！今助けにいくぞ！」

実際には全く関係ないのだが、少年の元へと急ぐ。その後、家に帰つた少年は、無事な居候に腹ペコなために噛みつかれることになつたのだった。

とある魔術の禁書目録より「上条当麻」を召喚。

追記もし学園都市最強の前に開いていたら？

学園都市。ここでは、超能力研究のために能力開発が行われている。しかし、その全てが合法的な訳ではない。学園都市の実質的な治外法権と外部との接触がほとんどない閉鎖性を利用することによって非合法な実験が行われている。

それも、一部の暴走というわけではなく学園都市上層部の認可を受けているという最悪の形で。

今もそんな非合法実験が行われている。

深夜の学園都市を深夜であるため当然なのだが、昼間だったとしても人気の少ない通りを1人の少女が走っている。ただし、少女には不釣り合いな学園都市製の軍用ゴグルと軍用銃という物騒なものを持った上で。

その少女は、態度にこそ生への執着が元々薄いため薄くなるよう精神を操作されている。出さないが、そんな少女でさえ怯えていた。今にもあの男が自分を襲うのではないかと考えると、堪らなく不安と恐怖が少女の精神を責め苛む。

そういうた不安と恐怖を必死に大丈夫だ、あの男といえども簡単に追い付かれはしないだろうと抑える。

そして、少女の後を少女が恐れている対象である男が追う。こちらは、少女と違い悠然な狩人としての余裕を感じさせる歩き方だ。だが、その男は武器の類いを一切身に付けてはいなかった。これでこのような自信を抱けるのだろうかと彼を知らないものは疑問に思うだろう。

後にその考えは、1人の少年の手によつて崩されるのだが、この時点ではその男　　白髪の少年　　はそのようなものを手にする必要を一切感じてはいなかつた。何故なら、彼は学園都市の頂点に位置する最強の超能力だからだ。

その能力名は、ベクトル反射。ベクトルとは力の向きあり、あらゆるものに存在するベクトルを直接操ることが可能なため、例え核兵

器を利用しようが、周囲一体が壊滅状態になつたとしても生き延びることが出来るだろ？おまけに意識的に能力を使うのではなく、無意識下で常時張り巡らされているため奇襲も効きはしない。

防御系統の能力ではなく応用することで、触れた状態での血液操作、石つぶてでさえ高速の運動エネルギーを持たせることで圧倒的な破壊力を持たせる、プラズマを形成するといった多様な攻撃も可能だ。「ギャッハッハッハ、何か企んでやがんな！いいぜ、一方的に相手をなぶるのも退屈だからな、のつてやる！」

そう少年が高笑いしながら何か仕掛けがあるなど考えながら少女を追いかけて行く。普通の人間とてただなにもせず逃げて行くのを見れば当然罠を疑うものであり、この少年は特殊な処置により脳内情報処理速度が速いためその程度のことは見抜いている。

それでも足を押し止めようとしないのは、先程述べたように自信の能力の絶対性である。

そして、少年が遂に少女をその手に捉える。罠が仕掛けられていると気づいていたため遠隔地から攻撃をするという選択肢もあるのだが、わざとのつてやるという考え方のためある程度ベクトル反射の応用で速度を速くしながら少女へと追いすがろうとする。

だが、その時少年の足元が爆発する。それは、少女がベクトル反射を突破するために仕掛けた地雷である。

足元からの攻撃であるならあるいは有効ではないかといった思考からなのだが、爆発が晴れた時そこには傷一つもついていない無事な姿を少年が晒す。

「地雷か、着眼点は悪くないが俺には効きはしね よ。」

そう少年がいい終えると同時に、少女を仕留めようと一気に接近する。

その時、一方通行の直前に使い魔召喚の門が現れ彼を包み込んだ。だが、包み込んだ次の瞬間には少年の体から弾かれると同時に霧散してしまつ。

ベクトル反射能力によつて少年は、3次元空間のみならず13次元

に至るまで反射できるためだ。

（何だつたんだ、今のは？空間転移系統の能力だと思うが、弾いた時に妙な感じがしたぞ？まあ、今はそんなことを考える暇はないか。）

少年が考へてゐる間に逃走しようとする少女の逃走を阻むべく、少年が行動を開始する。

ちなみに顔のないビルでも、滯空回線によつて得られた情報から世界最強の魔術師にして世界最強の科学者が自信の計画にはない未知術式の空間転移能力というイレギュラーに連れ去れなかつたことに安堵しながら目的が分からず首をひねつっていた。

とある魔術の禁書目録より「上条当麻」並びに「一方通行」を召喚。

## 第4話 使い魔はレベル〇（後書き）

上条さん、召喚に至らざりといった結末です。現実に空間転移系統の能力を防げるのに召喚された作品があったので書いてみました。

## 第5話 使い魔は超能力3人娘（前書き）

今回は、同じ超能力でも前話のとある魔術の禁書目録とはつながりはありません。別の作品です。

## 第5話 使い魔は超能力3人娘

爆発と共に今回ルイズが召喚したのは、3人のおそらく少女達だつた。但し、B A B E と刺繡の施された制服を来てゐるが。

今まで使い魔に逃げられていたルイズも子供相手なら問題ないだろうと思い近づいていくが、「ギャア！助けて」3人の少女の中央に位置する少女がルイズに手を向けたかと思うと突如として不可視の手に掴まれたかの様に弾き飛ばされ地面へと物凄い速度で叩きつけられてしまった。哀れルイズは、最高位に位置するサイコキネシスをもろに食らうという経験を味会うことになってしまった。この少女達はただの少女ではない。超能力が科学的に実証され、社会的に増加する超能力者が政治・経済・軍事に影響を与えるようになつた世界に属し、彼女達自信も日本政府が設立した超能力研究や超能力を活かした災害救助・超能力を利用した犯罪の鎮圧を行う内務省直属のB A B E と呼ばれる機関の実務を担う特務エスパーだ。それもレベル7と呼ばれる最高位に位置している。ただし、超能力者に対する迫害や最高位の超能力者のためかなり甘やかされて育つたことが原因でかなり性格が歪み我が儘なのが・・・。

ルイズ達にとつて運の悪いことに普段ならE S P リミッタ で能力を抑えているのだが、今は予知された災害防止のためにE S P リミッタ が解除されていた。

「ミス・ヴァリエル！とりあえずミス・タバサとミス・ツエルプストは、彼女の治療と彼女を見守つてやりなさい。君達、君達は何てことをいきなりするんだ！」

それを見たコルベルが慌ててキルケが爆発しないようルイズを見守るよう指示し、3人の少女と交渉を行おうとする。未知体型の魔法なのか、先住魔法なのかは知らないが何らかの戦闘能力を持っている以上は気が引けない。

だが、少女達から帰ってきた返答は「どうと

「先に私達に手を出してきたのはそっちだろー私達に手を出してきた癖に何をぬけぬくいってるんだよー！」

「うちちら手を出すなら、それなりの覚悟しちゃー！」

「私達を拉致しておいて何を言つのかしら？」

かなり好戦的な答えが返つてくる。これは、彼女達の性格にも起因するが、いきなり遠隔地へと無理やりさらわれるよう連れて来られたことも影響している。彼女達は、その仕事上あらぬ恨みを買うこともありえるし、何より反超能力団体普通の人々にも狙われている。

「待つてくれ、こちらに敵意はない。本当に話し合いたいだけなんだ。」これを聞いてコルベルが叫ぶ。本当に争うようになることは避けたいし、今までうまくいかなかつたとはいへ何よりルイズの使い魔になつてもらう必要もある。

「どう思う、紫穂？」

「！」の人が本当のこといってるんか？

それを聞いた先程ルイズに攻撃を仕掛けた少女と眼鏡をかけた少女が紫の色を帯びた銀色の髪の少女に話しかける。

彼女の能力は、サイコメトリ、つまり相手の思念を読み取つたり、残留思念から過去を読み取れる能力者だ。その中でも最高位に位置する彼女なら触れることが主体とはいえこの距離からでも思念を読み取れるため、相手の真偽を確かめるために向いていと見える。

「ええ、この人は嘘はついていないわ。警戒はしているもののむしろ戸惑つていて明確な敵意はないわ。ただ」

そこで言葉を切ると「明確な敵意はなくても詳しく読み取れないのでよくは分からぬけど、結果的に危害を加えられることになるかもしろないわ。だから気を抜かないで。」と携行を許されている拳銃の黒光りする銃身を見せつけながら怪しく笑つ。

「お、おうつ。」

「あ、ありがとな、紫穂。」

普段彼女と仲の良い2人もそれを見て、ひきつりながら答える。

「さてと、気を取り直して私達をここに連れ去った理由を話して貰おうか。」

3人組の中央に位置する少女がそう言つと、コルベールをサイコキネシスで近くへと引き寄せる。

「さあ、洗いざらい話してもらおうか。」

引き寄せるとコルベールに向けて、いつでもサイコキネシスを放てるようにながら事情を説明するよう求める（脅迫ともいう。）彼女達の現場主任が入れば、止めに入るだろうが後に精神的に成長するとはいえた頃の彼女達はこのような行動を普通だと捉えている。

「ああ、今話そう。だから、暴れないでほしい。」

メイジであるコルベールにとつて多少変わり者であるとされていても、銃は確かに厄介ではあるし脅威もあるとはいえたまで警戒する必要はない。むしろ、彼女達の持つている未知の能力を警戒していた。最も銃についてはそれはハルケギニアでな話で高レベルのサイコキノは余裕で防げるとはい、拳銃弾でも音速に達しているし、それだけでなくサイコメトリにより弾道を予測して精密に当てられるという事実を彼は知らないのだが。

それだけでなく警戒している能力でもこの3人の中で唯一攻撃的な能力を持つているサイコキノの少女は、ビルをその気になれば破壊できるため、ハルケギニアの魔法の威力では食い止められないのだろう。

そして説明を聞き終えた彼女達の反応はというと

「ふざけんなよ、超能力ならともかく魔法だなんて信じると思つてんのか！何が使い魔として召喚しだだ！」

「うちらがそんなのに騙されると思つとんのか！子供だと思つてなめんとき！」

かなり散々な答えが返つてくる。科学的に実証され、自分達が使える超能力ならともかく魔法の存在しない世界に属する彼女達が魔法

の存在を信じないのは当然といえる反応だ。

「ふざけた答えをした覚悟はできるんだろうな！」

サイコキノの少女がコルベルに向けてサイコキネシスを放とうとする。

「待って、薰ちゃん。この人は嘘はついてないわ。」それをサイコメトリの少女が押し止める。彼女は、コルベルが近づくと同時に手を触れながら彼の精神を読み取っていた。その結果信じがたい魔法が存在するということを発見していた。

「でもよ、魔法が本当に存在するなんて信じられないな。」

「それならあれを見て。」そう言ひてサイコメトリの少女が空を指差す。

指差した方向をサイコキノの少女と眼鏡の少女が見あげると、そこには2つの月が存在していた。

「嘘やろ、月が2つやなんて！」

「・・・・そんな馬鹿な・・・」

魔法の存在を疑っていた彼女達もこれを見ては信じないわけにはいかないだろう。彼女達のよく知る月は2つしかないのだから。

「でもよ、魔法が存在しても一生仕えろつていつてるんだぜ。」

まだ呆然としながらサイコキノの少女が言つた。説明の中につたのだが使い魔になったのなら一生仕えなければならないとなつているが、これを聞いたまともな人間なら誰もが拒否しようとするだろう。

「君達が使い魔になつたからって、悪いことが起きるわけじゃない。

「コルベルが使い魔となつてもうつ必要があるため、素早く説得しようとする。

「やめておいたほうがいいわ。」

それを阻んだのは、先程コルベルを助けたサイコメトリの少女だ。彼女は、もうすでに使い魔のルーンにあるとされる機能や前回の召喚まで読み取っていた。

「使い魔のルーンといったものを使い魔になつた存在には、施すもので原理は分からぬようだけど強制的に主人を好きにさせる効果があるとされているみたいね。それにおそらく未知のテレポートシヨンによるもので、以前召喚した使い魔は逃走しているんだけど、その中にルーンではなく魔術と呼んだ人がいるんだけど、その人にすると洗脳効果があるらしいわ。

それにこの人、悪い人ではないけど、使い魔の召喚は神聖な儀式であるのと以前召喚した使い魔が逃げたのが原因で、私達にどういった事情があれどもしても使い魔になつてもらわないと困ると考えているわ。」

コルベールに使い魔になつてもらうために、まずい事実が暴露されてしまった。そして、

「へえ、舐めた真似してくれるじゃん。そんな効果があると知っているのに、神聖な儀式だから従えつて言つてたのか。喰らえ、お仕置きのサイキック吹き飛ばし！」

それを聞いたサイコキノの少女が怒りを露にしながらコルベールにルイズよりも激しいサイコキネシスを放つ。

それを受けたコルベールが数メートル上空へとサイコキネシスによるダメージを受けながら吹き飛ばされ、地面へと落下してしまう。それを見て、ルイズの治療と見守つていたキルケとタバサが慌てて駆け寄る。

「でも、これからうちらどないしたらいんや? ここが本当にハルケギニアちゅうところならB A B E Lも当てにならないやん。」

それを遠目に見ながら、眼鏡の少女が呟く。

「それなら大丈夫よ。葵ちゃんのテレポートを使えば帰れると思うわ。」

サイコメトリの少女がそれを聞き、眼鏡の少女に打開策を伝える。気づいていないだけで、地球へ帰還できるかどうかは眼鏡の少女なら帰れるかもしれないのだ。

「そうや、うちの能力なら。本ならまかしどき。」

今更だが指摘されてその可能性に気づいた少女が目を瞑りながら周囲の空間を探つて行く。

眼鏡の少女の能力は、テレポーテーションである。テレポートは、超能力はPKとESPに分けられるが、これら2つの能力を組み合わせて初めて発揮できる合成能力と呼ばれるものに大別される。

空間移動の歪みをPKで、空間認識と呼ばれる空間を認識する能力をESPで行つていると考えられるためだ。

そして、これを利用することで空間移動の痕跡を元に空間の移動先を追跡・移動することも可能だ。事情後に超能力犯罪組織のリーダーに拐われた暗殺組織の洗脳を専任にする超能力者を仲間が助けるためにこれを行つている。

そして程なく、追跡が十分可能な規模の自分達が連れこられる原因になつた空間の歪みを捉えることに成功する。

「空間の歪みを捉えたで！この規模なら十分帰れるわ！」

歓喜を帯びた声で仲間の22人に伝える。

「よつしや、葵任せたぜ。」

「葵ちゃん、任せたわよ。」

「よつしや、うちに任せとき！」

その声とともに、眼鏡の少女がテレポートを行い、その場から姿を消す。

こうして、レベル7の超能力者がおそらくテレポートターゲットによつておそらく拉致され、表に出さないだけで心配する主任や我を失うほど心配する局長など右往左往している召喚される前の場所へと帰還することに成功した。

その後の拉致された状況の質問によつて当初は信じなかつたが、サイコメトリの読み取りもあり、ハルケギニアと呼ばれる未知惑星もしくはパラレルワルドへと事故によつて連れ去られたことが判明したが、この事実は秘匿された。

また、テレポートによる到達も召喚時の歪みを利用したものであるため不可能だつた。

ちなみにルイズ達は、治療を行つてゐる間に消えていたためまた逃げられたという事実を痛みとともに噛み締めていた。  
絶対可憐チルドレンより「ザ・チルドレン」を召喚。

## 第5話 使い魔は超能力3人娘（後書き）

同じ椎名作品繋がりというわけではないんですが、召喚先は絶対可憐チルドレンです。能力の設定や話し方に誤りがあったら指摘してください。

## 第6話 使い魔はマイナス（前書き）

マイナスとなつたらばれはどうか？学園長ネタです。

## 第6話 使い魔はマイナス

前回の使い魔召喚から一週間後、再び使い魔の召喚が行われようとしていた。サイコキネシスによる攻撃は、幸い致命傷には至ってはおらず今後恒久的に障害を残すようなものでなかつたもののそれでも全身に複雑骨折といったものを引き起こしていたし、コルベルは下手をしたら肺に骨が入りかけていたため肺に損傷を負っていたかもしかれなかつたほどだ。

ちなみに水の秘薬などの高価なものに関する費用は、ヴァリエル家に娘が使い魔召喚の際に怪我を負つた事実を知られたくないため全て魔法学園、正確にはオスマンのポケットマネーから出されている。学園の名誉のためといえば聞こえはいいが、実際には名門としての信用を失いたくないためだ。

そしてオスマンは、それだけでなく今までの使い魔の召喚で召喚された対象が全て先住か未知の魔法を使っていることから危機感を抱き、ルイズに対して進級を逃げられたものの使い魔を召喚できために特別に認める打診したが、ルイズに断られてしまった。

ルイズはメイジの優位性といったものをかなり信奉しており、メイジたるもの使い魔を手にいれなければならないといった考え方と初めて魔法を使えた事実に固執しているためだ。

とはいえることは、傍迷惑な考え方であり学園に通う他の生徒からもルイズに召喚を行わせるべきではないとの意見が登つてきているが、当のルイズが強行してしまつては意味がない。何しろ杖さえあればできるのだから。

ヴァリエル家の人物を手荒な目にあわせるわけにはいかず、そのためコルベル、キュルケ、タバサに加わりオスマンも参加することになった。

オスマンも完全に物理的な意味ではなく精神的な意味で身綺麗なわけではないが、そのメイジとしての実力は非常に高く、伝説と称され

ている。

最もそれはゼロの使い魔の話で、他作品の都市破壊が可能なもののすらいる特殊能力者や音速反応など可能なレベルに達した人間の敵ではない b y 作者

そして、ルイズが恒例の爆発とともに使い魔を召喚する。使い魔として召喚されたのは、学生服を着た童顔の笑みを浮かべた1人の少年だった。一見して危険なものは、何もなさそうに見える。

だが、周囲にいるルイズ達は言い知れない不快さや嫌悪をこの少年から感じといつていった。今まで召喚した人間の中にいた人物の気迫に比べれば劣つていて、それでも一切が関わりたくないと思われるほどだ。

この場にいる人間は、知らないがこの言い知れぬ不快さや嫌悪といったものは、マイナスと呼ばれる負の精神的要素により発現する残酷な性質を持つ特殊能力を宿した人間特有のものに由来していた。

『ねえ～、ここはどこなのか教えてくれないかな？いきなり見覚えのないところにいてこっちも混乱してるんだ。周囲をぶち壊したくなるほどにね。』

その少年が言葉を発し、その内容も危険なものだがますますルイズ達を不快さが襲つてくる。

「主らは下がつておれ、この者とは儂が話そつ。主の疑問は儂が答えてさしあげよう。」

オスマンは、必ずしも身綺麗な人物というわけではないが、一角の人物であることは事実で、この少年の異常性や危険さを感じ取つていた。生徒を守る達に下がつていてるよう言いながら、少年にコルベールが今までしたきたように説明を始める。

『へ～え、アブノマールやマイナス以外にも魔法なんでものがあつたなんてね。それで僕に使い魔とやらになつてほしいのかい？』

「その通りじゃよ、これは神聖な儀式なのでな。主が使い魔として従うというなら厚遇を保証しよう。」

オスマンは、この少年が危険人物であると認識していたがそれでも

使い魔として召喚されたことや好条件を出すなど交渉によって解決できるかもしないと考えていた。また、うまくいかなかつたとしてもいざとなれば魔法を使うことで取り押さえることが出来るとも考えていた。

『嫌だよ、何でそんな奴隸みたいなことしなくなつやいけないの。それに僕は、貴族だか何だか知らないが幸せなエリートが大嫌いなんだ。』

「そうか、では少し手荒なことをさせてもらおうかの。」

そういうと同時に素早く風の魔法による衝撃波を少年へ向けて放つ。ハルケギニアでは、魔法の意図的な制御体系が確立されていないが、それでも個人の技量によつて呪文の詠唱というプロセスを短縮することが出来るものもあり、オスマンはそのレベルに達していた。威力を殺さない程度に抑えていたとはい、確実に少年の体を貫いていた。だが

「何じやと！」

オスマンの口から上がつたのは、驚愕だつた。確かに少年が衝撃波に襲われ、出血し衣服が裂かれるところをこの目で見たのだ。だが、少年の体は次の瞬間には少しも傷ついていなかつた。いや、傷ならまだしも服すら直つていた。

『へ～え、これが魔法か。でもそんなプラスな能力じや僕達マイナスには効かないよ。』

オスマンは内心おぞけを抱きながらも、再度魔法による攻撃を試みようとしていた。

しかし、それよりも少年の動きが速かつた。

その少年は何処からともなく巨大なネジを取り出すと、『自分が貴族だから、魔法使えるから安全だと思つてた。だとしたら、甘いよ。』といつ台詞とともにに捉えられない速度でオスマンの体を貫いた。

「オ ルド・オスマン！」

「学園長！」

「オスマン先住！」

やり取りを見ていたライズ達から叫び声が上がる。この場にいた誰もがオスマンが死んだと思つたしオスマンもネジが体を貫く感覚を味わっていた。

そう少年を除いて。

「つづー！」

少年と同じように確実にネジに貫かれたというのにオスマンは何故か無事だった。それどころか貫いたネジも貫いた跡も残つていなかった。

オスマンは、体をネジで貫かれるという生々しい感覚を味わつたために精神崩壊を起こすことはなかつたもののその場に気絶し崩れ落ちつてしまつた。

『あらら、これじゃ遊びがいがないな。それじゃあ君達で遊ばせてもらおうかな。』

少年は最早笑みをやめ、オスマンを貫いたのと同じネジを向けながらルイズ達を見据える。その視線に次は自分の番なのかと恐怖を味会うルイズ達。

だが、その少年が気分屋なのに救われることになる。

『とおもつたけど、生徒会戦挙が気になるしね。それに何よりあの子との決着がついてない。君達相手に関わつてる暇はないか。じゃあね。』

そう言い残すと今までの使い魔と同じように唐突に消えてしまった。恐怖を残して。

ちなみに彼のマイナスは、大嘘つき。因果律を操作することによりマイナスとなかつたことにしたもの以外の全てをなかつたことにする能力である。

今少年が帰還できたのも、召喚されたことをなかつたことにしたためだ。

めだかボックスより球摩川襷」を召喚。

## 第6話 使い魔はマイナス（後書き）

球摩川については、大人しくかえつてもらうために生徒会戦挙中の会戦以前からの召喚です。オスマンについて身綺麗でないなど作中で書いたのは、作者の個人的見解なので文句などがあつたら感想でお願いします。

## 最終話 ついに才人召喚（前書き）

これで終わりです。ただし、次から主題は変わりませんが番外編を行います。

## 最終話 ついに才人召喚

その後も、ルイズは使い魔の召喚を行つたが、何故かその全てが帰還可能な能力を備えていた（例として上げるなら、スキマを操る妖怪、准尉の能力を取り込んだ吸血鬼、平行世界を移動できる大統領、魔導探偵と魔導書のコンビ、ある村の祭神、情報操作能力を持つアンドロイド、平行世界で起きた出来事をタイムラグなしで起こす魔眼を備えた少年など）

だが、今回の召喚では何の問題もないだろう。

何故ならば召喚先は、秋葉原に来た少年の前なのだから。

## 最終話 ついに才人召喚（後書き）

ちなみに召喚したのは、東方プロジェクトの八雲紫、ヘルシング本編終了後のアーカード、スティル・ボールランのファニ・・ラウズ、デモンベインの大十寺九郎とアル・アジフ、涼宮ハルヒの憂鬱の長門有希、ひぐらしのなく頃にの羽入、11eyesの皐月駆です。

## 番外編 トリステインの滅亡（前書き）

最終話でひねりがないという感想と自分もひねりがないという考え方  
ら使い魔を召喚できていなかつたらトリステインがどうなつていた  
かという前提で番外編を書いています。

ルイズは、春の使い魔召喚から使い魔を手に入れることができなかつた。いや、正確には使い魔を召喚することは出来たのだが、召喚した使い魔に訳の分からぬ能力を使われて逃げられてしまつたのだ。

トリステイン魔法学園から特別に使い魔の最召喚を認められたが、何度召喚しても逃げられてしまうのだ。その中には、命に関わるものでこそないが、外傷を負つてしまつこともあつた。

それでも彼女は、使い魔召喚をめげずに使い魔をメイジたるもの手に入れなければならないという思いと召喚した使い魔の逃走というメイジに逆らうことを容認できずに行つていたが、さしもの彼女もしまいには諦めてしまつた。

幸い、使い魔には逃げられたもののトリステイン魔法学園から使い魔を召喚した事実があるため特別に進級を認めると言われていたのでそれを利用して進級することは出来た。最もそんな手段を使つたことで屈辱を味わつたのだが。

使い魔を手に入れずに進級し、自身も使い魔召喚を訳の分からぬ能力を恐れてやめるよう言つていた生徒達からそのことでいじめられ、魔法も失敗魔法ばかりでルイズは鬱屈した日々を過ごしていた。だが、そんなある日ルイズに転機が訪れた。彼女と関わりのあるトリステイン王国の王女アンリエッタの来訪である。

アンリエッタは、ルイズに対して現在内戦下のアルビオン王国の皇太子ウエルズヘと出した手紙について相談しに来たのだ。アルビオンで内戦を起こしたレコン・キスタは、ハルケギニア全土の統一を図つており、トリステインもアルビオンでの内戦が終わつたら、侵略される恐れがあるのだ。

そのため、平民ですら爵位を買い貴族になれるというゲルマニアへとアンリエッタが嫁ぐ形で同盟を結ぶことになつたのだが、その手

紙はその同盟を壊す可能性を秘めているのだという。

その相談を受けたルイズは、アンリエッタが友人で有る自分をトリステインの危機のために頼つてきた事実に感激し貴族で有るたるメイジたるもの王国の危機に立ち向かうという考え方から、自身がアルビオンへと向かい万難を廃し神聖な王権へ逆らうレロン・キスタに手紙が渡る前に回収するとアンリエッタの前で申し出た。それには、鬱屈した日々から逃れたいという思いやゼロと呼ばれ馬鹿にされている自分が王国の危機を救うというロロイズムも影響していたのかもしれない。

アンリエッタもそれに感激し、明朝手紙の回収を依頼して有るルイズに頼り可能で有るなら彼女に手紙の回収の協力を要請するようになつた魔法衛士隊の騎士を向かわせるといい、いなくなつてていることを気づかれる前に王城へと戻つていた。

だが、これは素人でも分かるような無謀な行為にすぎない。中世では、現代と違ひ戦略・戦術上に騎士道など信じられないような考えもあつたため仕方がないのかもしれないが、それにしてもこういった非合法工作のようなものを行わせるには少數の訓練された人間を向かわせるのは常道で有るが、素人を同行させた上で戦闘訓練を受けた人間が一人しかいない状況で成功すると思うのは、個人の妄想や現実と理想との違いを理解できないロマンチストでしかないだろう。

そもそも本当に何らかの解決策を立てる氣が有るのなら一介の学生であるルイズを頼るのではなく信用できない人物もいるかもしれないが、高官などとばれてしまえば問題になり国際的信用を損なう手紙の物理的は家内のような手段ではなく政治的・外交的手段により解決策を図るべきだし、悪気はなく理想論を信じているだけと/orえ友人を戦地に送り込むべきではないだろう。

そのような考えにルイズとアンリエッタは至ることなく、真剣にこの手段で事態を解決できると信じていた。そして、翌日、ルイズはアンリエッタの命令を受けた騎士が許婚であるワルド子爵だったこ

とを喜びながら、アルビオンへと向かつて いた。

実際には、原作と違ひ頼れる友人や彼女を大切に思う使い魔の存在もなく、レコン・キスタに通じて いるワルドと共に行動するという最悪の事態な のだが。

アルビオンへとゲリラ戦を行うために空賊へと扮していた王軍の船に出会うという幸運もなくルイズは、アルビオンへとついたが、着くと同時にレコン・キスタへ通じて いたワルドと虚無の可能性の有る少女の引渡しと重要な情報を引き渡すという連絡を受けていた港を占拠していたレコン・キスタの手に取り彼女は拘束されてしまつた。

これがトリステインの滅亡につながる序章だつた。

## 番外編 トリステインの滅亡（後書き）

この作品でのワルド子爵は、原作でレコン・キスタ側が有利な状況であるのにウェールズの暗殺と手紙の確保を任せられていたことに疑問があるので、アルビオンへと向かつたのはルイズが虚無かどうかを確認するための引渡しと手紙についての情報を渡すためとレコン・キスタ側での行動を行うために向かつたという設定です。

## 番外編 オカルトな業種を襲つた騒動（前書き）

すいません、一応前話の続編を書いたんですが原作世界を崩壊させてしまうので自粛します。  
これから小ネタをやります。

## 番外編 オカルトな業種を襲つた騒動

199X年、日本。この国には、GS（ゴーストスイーパー）と呼ばれる除霊業者が存在していた。除霊業者というと非科学的な感じがするが、この世界ではオカルト能力が公開され、広く世間に浸透されていた。

それでも社会の基盤の元が科学であるため懐疑的な見方の人間は少なくなかった。

この物語は、あるGS事務所を襲つた事件の顛末である。

そのGS事務所は、東京都内のオフィス街に位置していた。パツと見は、ただのレンガ作りの建物だが見る目のある人間や一般人でも多少靈感のあるものならただの建物でないことが分かるだろう。二重三重にも渡り強力な結界が張り巡らされ、よほど力がある者でもない限りは突破されない作りになつていた。

「横島くん、遅いわね。全くあの馬鹿は何考えてんだか。」

事務所内でこの事務所の所長であるボディコンに身を包んだ金髪の業界トップのGS美神令子が毒づいた。それも物凄い表情で。

「まあまあ落ち着いてくださいよ、美神さん。横島さんにも横島さんの事情がありますよ。」

それを諫めるのは、黒髪の少女氷室キヌ。元々は幽霊で成仏する手段を金を貯めて教えてもらうという条件で事務所で働いていたのだが、ある一件で肉体を取り戻したことをきっかけに一時期離れていたが、その後復帰している。

彼女らが今話題にしているのは、この事務所でバイトしている横島忠夫の遅刻についてだ。

「ふん、あの馬鹿にはそれなりの制裁が必要なのよ。」

美神は、それでも意見を変えようとしなかった。そもそも非があるとはいえ美神の暴行とまで言える横島への制裁は日常茶飯事と化しているのだ。

「マスター、横島さんがただ今一階に到着します。」

どこからともかく姿が見えないにも関わらず声が横島の来訪を報せる。この事務所に宿つている渋鯖という科学者が作り出した渋鯖人工幽霊壹号の声だった。

人工合成によつて作り出された魂なのが、これとドクタースのマリアの2例しか世界にも人工の魂は存在していない。

「よし、あの馬鹿をしばいてやるとするか。」

「美神さん・・・・」

美神が物騒なことを言つてそれにおキヌが呆れるがこれも日常の風景だった。

この時までは。

「マスター！！」

「ええ、分かつてゐるわ！！」

その異変に気づいたのは、結界の管理を行つてゐる渋鯖人工幽霊壹号とやはり業界トップの美神だった。

結界内に何らかのエネルギーが強引に侵入してきていたのだった。それも・・・

不味い、このままじやあの馬鹿の所に。素早くエネルギーが結界内の何処に侵入したのかを探つたのだが、運の悪いことに横島が今まさに入ろうとしている出入口の前に侵入していただった。

「おキヌちゃん、一階に行くわよ！」

「待つてください、美神さん。どうしたんですか？」

上階に位置する所長室を電光石火の速度で飛び出す美神を訳が分からぬながらも、緊迫した雰囲気に押されたおキヌが慌てて後を追つた。

「結界を何かが破つたの！－このままじや、横島くんが！－」

それを聞いておキヌも青ざめる。おキヌにとつて横島は仕事の同僚以上に大切な存在になつていた。

そして、二人がやつとの思いで一階には誰もおらずもぬけの殻だった。唯一人がいたと示す証拠は、開け放たれたドアだけだった。

「美神さん、横島さんはどうなったんですか。」

「おそらく空間転移系統の能力ね。大丈夫、空間の歪みを追跡すれば横島くんを助け出せるはずよ。おキヌちゃんは、オカルトGメンにこのことを知らせに行って。」

「はい、分かりました。」そのままおキヌは、事務所の隣にあるオカルトGメンことECPの超常犯罪対策課のオフィスへと知らせに向かう。

まもなくおキヌの知らせを受けたGメンの捜査官である美神の母の美神美知恵と美神の昔なじみで初恋の人である西条輝彦がおキヌとともに駆けつけてくる。

「令子、話は聞きました。調査はしますが、彼が一度と帰つてこない、いえ帰らない人になることも覚悟しておきなさい。」

開口一番やつてくるとすぐに美知恵の口から非情なことが告げられた。

「どうしてですか、美神さんは横島さんが無事に帰つてくるつていいましたよ。」

その意味を理解したおキヌが血相を変えて叫ぶかのように言つて。それに答えるのは、西条だ。

「横島くんは、一応文殊使いなんだ。その上アシュタロス事件の解決にも関わっている。誇張されたものもあるだろうし、彼自身はその認識はないだろうが、文殊使いの彼を狙おうとしている勢力も多いんだ。今回拉致したのが、そういう勢力ならまず間違いなく洗脳されて都合のいい操り人形になるか、あるいはモルモット扱いになるかもしれないんだ。」

西条が横島とは中が悪いとはいえた流石に沈痛な声で事実を伝えた。何時までも嘘で塗り隠せる訳ではないのだ。

「「めん、おキヌちゃん。あなだが心配しないようにといったのよ。彼の両親の資産を考えると身代金誘拐の可能性もあるけど、高度な空間転移を使ったことを考えると、その可能性が最も高いわ。」

実際には、ランダムな空間転移の偶発的な結果なのだが、目的もな

しに空間転移を使う訳がないと考へてるのでその考へを思いつくものはいなかつた。

「横島さん・・・」

おキヌが悲壮な声で呟く。

「あれ、皆して何してんですか？」

だがその時シリアスな雰囲気をぶち壊す能天気な声が響いてきた。見るとそこには、当の横島が立っていた。

「――横島くん　さん」

美神、おキヌ、西条が驚愕のあまり声を漏らし、美知恵も拉致された横島がいることに声こぼ出さないが、驚愕を隠そとしなかつた。

「どうしたんです、そんな深刻な顔を皆して。」

横島が周囲の態度がいつもと違つことを敏感に感んじとり、訳を尋ねる。

「横島くん、あなたは空間転移系統と思われる能力で拉致された。拉致されたあなたが、どうしてここにいるか説明しなさい。」

その問いに美知恵が逆に問いを放つ。そしてその問いに鏡のようなものに入るとおそらく異次元と思われるハルケギニアに連れ去られたこと、無理矢理一生涯使い魔になれといわれ訳の分からぬ力を施されたので文殊を使って力を解除した後に逃走したきたことなどを横島は説明した。キュルケに襲い掛かつたなどは流石に話そうとしないが。

「つまり、偶発的な空間転移の事故で連れ去られた訳で事件性はないと？」

「ええ、そうみたいつすね。ま、美神さんみたいならともかくあんな貧乳絶対にお断りですよ。へふ――」

横島が美知恵の問いに能天気に答えるが、その時横島の顔面に手がめり込み、そのまま数メートル弾き飛ばされてしまった。

殴つたのは、美神だ。彼女は、実際には優しいところもあるのだが、プライドの高さから高圧的な態度をとつてゐる。そして横島を彼女も本気で心配していいたというのに、無事で帰ってきたのがプライド

の高さから制裁を下せないと許せなかつたのだ。

「あんたなんかを心配して損したじゃ ないの！！」

「ヒィイイイ 許して下さい、美神さん。せっかく助かつたの

に

！――

呆れるおキヌと西条と美知恵を尻目に美神が横島を制裁するといつものことが展開されていた。

今日も美神令子除霊事務所は平和である。

## 番外編 オカルトな業種を襲つた騒動（後書き）

小ネタにしては長いでしょうか？

ちなみに美神が空間転移とわかつたのは、靈視を書いていないだけで行つたためで横島の両親が資産家なのは世界の第一線で活躍する商社マンの中で相当優秀だからです。

母親は活動するだけで経済を変動できる規模ですし。

逃走する使い魔達本編で、めだかボックスから球磨川禊が召喚されたが、それは球磨川禊が意図したことではない。召喚自体が実際にはランダムなのだが、そもそも球磨川禊の前に開いたのには、当人達も知らないわけがある。箱庭学園。そこは、江戸時代から連綿と続く非常に巨大なマンモス学園であり、三十以上もの俱乐部が存在しても問題ないほどだ。

とはいってこの学園では裏面で非合法の人体実験をも含めたフラスコ計画という計画を行つており、それは人為的に人体構造上ありえない能力を發揮する天才を作り出すことを主眼にしている。そんなマンモス学園の中を、一人の男が歩いていた。一応この学園の転校生なのだが、モノクルをかけなぜか執事服を着ている。

彼の名は、蝶ヶ崎蛾々丸。奇抜な服装をしている以外には、何も変わっていないがフラスコ計画の当初の目的を達成できなくなるというアクシデントを解決するために招聘されたマイナスと呼ばれる能力を持つていてる存在だ。

ただし、そのマイナスと呼ばれる能力の発動には残虐性を宿すことになる負の精神状態が必要であり、彼もマイナスにより理性的に見えても実際には残虐な性格を表面には出さないだけで宿している。そんな彼が学園内をさまよっているのは、マイナスと対立する生徒会対策ではない。単純に迷っただけなのだ。

この規模のマンモス学園では、それも当然だろう。

彼が学園内をさまよっていると、突然その前に鏡のようなわけのわからないものが出現し、その次の瞬間には彼を飲み込んだ。が、その鏡のような物体は唐突に消え去った。

彼にもあれがなんのかは分からなかつたが、咄嗟に自信のマイナス不慮の事故を発動したために消え去つたのだ。いや、正確には消え去つたのではなく別の場所へ移動したのだが。

不慮の事故とは、防御に特化したマイナスでありそれも単なる防御ではなく肉体的外傷・精神的外傷といったものや地震に家族がいなことから家族といったものすらも他人に押し付けるといった物理を無視したものだ。

「何だつたんですかね、今のは？」

彼も疑問に思つたが、さして実害がなく「不幸をすべて周りに押し付ければ自分は誰よりも幸福になれる」という考えの持ち主のため他人に押し付けたことで実害が生じても自分には関係ないかとまた見覚えのあるところへ出ないかとさまよい続ける。

だが、このとき彼は知らなかつた。自分の能力で押し付けたものが意図的に押し付けることも可能なだがランダムに押し付けたため自身の敬愛する球磨川禊を飲み込んだことを。

## 番外編 召喚は不慮の事故（後書き）

とゆう訳で球摩川襷を召喚されたのは、蝶ヶ崎蛾々丸が関与していたというわけです。次は、本編と関係ないものをやります。

## 番外編 忠実だった使い魔

ハルケギニアのトリステイン魔法学園で、ルイズが使い魔召喚について召喚したのは平民だった。平民を使い魔とするのは、当然問題が有る。

召使にするならともかく平民では、使い魔の役割である主人の警護や秘薬の採取を行うのに不十分なためだし、そもそもメイジよりも存在としか認識していないという感情的・思想的な問題もあつた。平民にしては、珍しい格好をしいかつい顔つきをしていたが、どうのつまりは所詮单なる平民に過ぎない。

使い魔として扱うルイズもそうだし、この場にいる人間は教師のレベルを含めて全員そう思つていた。

だが、その評価は覆されることになる。翌日に行われたギーシュの態度を見かねたルイズの命令により代理として出た決闘で格闘技術でギーシュのゴーレムの攻撃を受け流しながら素早く術者のギーシュを制圧することで貴族の戦いでないといった意見もあつたが勝利し、数週間後に起きた怪盗フーケを往復するのに半日もかかるといつた距離や人家が周辺にほとんど存在しないといった矛盾からプロとして使い魔当人は協力者か脅されていると考えたのだが、フーケの正体がミス・ロングビルであると突き止めたのだった。

そしてルイズは、自分がほかの使い魔よりも遙かに強力な使い魔を召喚した幸運を喜び、使い魔との間に信頼関係も出来ていると信じていた。

だが、その信頼は使い魔の手によつて裏切られることになる。

あくる朝ルイズが起きてみると、使い魔の姿が部屋から消えていた。慌ててルイズは学園内を探したが、その姿は学園内から消えていた。血相を変えたルイズに何があつたのかと問い合わせた教師によつて学園側も使い魔を探すのに有る程度協力したのだが、分かつたのは厩舎から馬が一頭消えていたことだけだった。このことから馬を使い

魔が盗み出し、逃走したと考えられた。

こうしてルイズは、信頼していた使い魔に逃げられてしまったのだが、これはルイズの意見で当の使い魔本人はそう思つてはいなかつた。

使い魔として召喚されたその男「ゴルゴ13」とデューク・東郷が大人しく従つていたのは、情報収集のために過ぎなかつた。本来どのようないデオロギーにも従う男ではないしサバイバル技術や潜入工作に間する技術も國家機関からも危険視される超A級スナイパーであるため身に着けていたので生活のためにルイズに従う必要もなかつた。

月が2つ有ることや空を飛ぶ魔法の目のあるにしさらにルイズの発言によつてこの世界を地球外の惑星かパラレルワールドであると思われる全く未知の世界で活動するために使い魔といつた偶発的な出来事を隠れ蓑にし、この世界の政治体制や特殊能力である魔法や通貨などの情報収集を行つていただけに過ぎない。男がプロとしての活動で今まで生き延びてこられたのは、情報収集などを事前に行い勝てる体制を事前に整えていることが大きかつた。それが未知の世界でかつ特殊能力が存在するならばなおさらだ。

情報収集を満足いくまで行つたと判断したために、当初の予定通り消え去つたのだ。ルイズは、使い魔が逃走したことを残念がつていたがこの男の活動内容を知れば依頼主すらも裏切つたら殺すといった徹底的に自分の生命に危害を加える対象を排除してきたために、殺されなかつたとはいえ自身が暴行行為や食事をとらせないといった行為を行つていたために青ざめるだろう。

ルイズが生き残れたのは、ゴルゴ13が依頼の内容を邪魔する対象や明確に敵意を抱いた相手しか殺そとせず普段は生命を尊重するといった態度や戦闘に対する有る程度必要性が有るなら容赦なく殺すとはいえポリシーを持つていていたゆえ周囲の態度から予期していいと考えられたため拉致したわけではないということや地球ではバッシングされるであろう行為も政治体制や価値観からの相違に過ぎ

ず意図的に行つていいわけではないと理解していたためだった。

後年ハルケギニアでGのコードネームで呼ばれるメイジ殺しが活動することになるが、これがルイズが召喚した使い魔であることを誰も知るものはいなかつた。

「ゴルゴ13よりゴルゴ13」と「デューク・東郷」を召喚。

## 番外編 忠実だった使い魔（後書き）

「ゴルゴ13の行動がおかしいでしょうか？」そういう意見をお持ちでしたら感想で意見を述べてください。

## 番外編 最悪の少年（前書き）

今回は、残酷描写と原作キャラの死亡があります。嫌いな人は見ないほうがいいです。

トリステイン魔法学園でルイズが召喚したのは、奇妙な格好をした平民の少年だつた。ルイズ自身は反対したが、使い魔の召喚は一度と決められているために平民を使い魔にすることになつてしまつた。ハルケギニアでは、平民に対する扱いが極めて低くメイジに対して劣つた存在だと見ているメイジも中には存在している。そして使い魔は、主人に使役されるためだけの存在であつた。

そのため、ルイズはその中では比較的まともな人間であるもののその少年を使い魔として自身がどのように扱おうと問題はないとしたらしい。それが使い魔として一方的に行使されることに反発した少年へのお仕置きと称して行つた暴行行為も痛痒を覚えなかつた。しかし、下手をしていたら死亡していのかもしれなかつた。鞭は力の弱い人間でも場合によつては音速を超え、食事を別口で入手することに成功したが食事を長期にわたつて抜かされたために幻覚が生じるといったことも確認されているし餓死することも当然考えられた。

だが、一方の少年としてはたまつたものではない。これがハルケギニアやでなければ似通つた封建体制を行つてゐる国なら別かもしれないが、少年が育つたのは20世紀の日本という極めて平和な民主主義体制の国であり、そんな扱いをうけて好意を抱くわけがない。ルイズに従つてゐるのは、生活のためと人家が周囲に見られないとめに逃走することがが困難と考えていたからで、機会さえあれば逃走してやるとも考えていた。

だが、この少年はそれを実行することはできなかつた。そんな機会を手に入れる前にこの少年の現在住んでゐる村に端を発する病氣の餌食となつたために。

その日、ルイズの異常に気付いたのはキュルケと彼女の友達のタバサだつた。ルイズとキュルケは仲が悪いように見えて実際にはそれ

なりの仲であり、お互いがお互いを思いあつていた。

キュルケは、ルイズがいつもと違ひ大分時間がたつても つても授業までは間があるので 現れないことに気づいていた。

ルイズは、魔法を使えないがために馬鹿にされているが、その分通常の授業をがんばるなどしていた。その彼女が遅れてくることがあるだろうか？かなりの早起きをしているというのに。

気にすることはないのでもかもしれないが、胸騒ぎを覚えた彼女はタバサを誘つて彼女の部屋へと様子を見に伺つた。だが、それが元でただの胸騒ぎではないことがわかつてしまつ。ルイズの部屋に行つてみると鍵が閉まつていたため、ドアをノックして中に呼びかける。だが、それでも反応はなかつた。

「ルイズ、起きなさいよ。このままじゃ、授業に遅れるわよ。」

反応がないことに業を煮やしたキュルケが大声で呼びかけるが、それでも反応はない。

「アンロックを使って入つてみるべき。」

「そこまでする必要は有るかしら？確かにこれだけ呼びかけて反応がないのはおかしいけど……。」

キュルケは、タバサの意見に反対するが、タバサの勘が告げていた。この中から今まで戦闘行為をガリア花壇騎士団の非合法工作を行う部門として行つてきた中で感じた血臭ともいうべきものが残滓がかすかに存在していると。

アンロックを使って、キュルケとタバサの2人は部屋の中に入つてみると、ベッド脇にルイズが倒れている姿を発見してしまつ。病気か怪我をしているかで動けないのではないかと思つた二人は、ベッド脇に駆けよつてみると2人が発見したのは変わり果てたルイズの姿だつた。このとき2人は使い魔の存在を失念していた。

変わり果てたルイズの姿を見てキュルケは、朝食べたものが喉へと競りあがつてきた。タバサも無表情でこそいるが、ガリア花壇騎士団の人間として戦闘行為を行つてきた彼女でさえも怖気を感じ得な

かつた。

それは、ルイズの死体だった。とはいえた通常の死体であるのならば、確かに悲鳴を上げるなどしていたかもしだれがそれさえ忘れさせるほどの惨殺死体だった。いや、惨殺というものでも生易しいかもしだれなかつた。

ルイズの顔は、それなりに綺麗という部類に入るものだらう。だが今はその顔にかつての面影はなかつた。顔は、鋭利な刃物で徹底的に切り刻まれ誰なのか判別できないうちやぐちやという擬音が似合うものへと変貌し、ところどころ顔面の皮膚が剥げ落ちていた。

それだけでなく服を脱がされた上で体も全身の数箇所を切り刻まれ、先ほどは気づかなかつたが血の海を作つていた。それに、心臓を最終的に一突きされているとはいえ下手をしたら生きたまま切り刻まれていた可能性も有るのだ。

「うおおーー！」

キュルケとタバサの2人が、ルイズの死体に気を取られている隙にこの狭い部屋のどこに隠れていたかは不明だが、血まみれの肉切り包丁を抱えた使い魔の少年が踊りかかってきた。

しかし、その少年はあっけなく拘束されてしまうことになる。戦闘の経験がなく魔法頼みのキュルケで有るなら室内ということもあってたおせていかもしれないが、タバサは実践経験をつんでいた。

その彼女からも男女間には当然筋力の差がある上に何故か馬鹿力を発揮していたが、戦闘に対するプロでないことが最愛し素早く相手の凶器を落とし、相手の手首をつかむと同時に床へ投げつけ相手を気絶させることに成功した。

ルイズを殺された怒りに燃えるキュルケをタバサはなだめ、この2人は学園の教師に使い魔によつてルイズが殺されたという事実を報告する。この事態を受けた学園側は、気絶していた少年を部屋へ厳重に手かせの変わりにロープをつけ、拘束し彼女の父のラ・ヴァリエル公爵や貴族を殺されたという事実のために王室へと知らせを送る。これが学園の名譽、いいかえれば学園の信用問題をそこなう

ことに発展するが流石にこの事実を学園の保身のために隠蔽することはできはしない。

この事態を受けたラ・ヴァリエール公爵と王室 ツタ  
は激怒し、その少年を凶器をそれなりに個人的親しさがあつたために出入りしていた厨房から盗んだなどおざなりの調査をした後にギロチンでの処刑を決行してしまう。拘束されている間の少年の態度があまりに普段と違うことや水メイジからハルケギニアでは生物学が発展してしないので専門用語は使わないが脳障害を引きおきしているのではないかという少年への弁護は成り立たなかつた。

中世では、三権分立が成り立つておらずそれが権力者で有るならばともかく権力者が裁判をかけずに入を殺すことができるためヒルイズの親や友人が公爵や皇女であったことにこれは起因する。いや、それ以前にメイジが平民の上位に立つという感情的な問題もあったのだろう。

だが、何故この少年は突然変わってしまったのだろうか？それは、少年の脳内に巣くつていた脳を犯す病魔に起因する。

一般には公開されず日本政府の化学兵器転用をもくろむ秘匿研究機関 実際にはその機関を支援する勢力の金集めなのだが

では離見沢症候群と離見沢村特有の風土病であるために呼ばれていた。これは、人間の脳内に巣くう寄生虫によって引き起こされる病気であり脳内の神経伝達物質を操ることにより、それにより周囲への疑心暗鬼を催され、最終的には攻撃性や残虐性、凶暴性が増加しその人にとつて大切な人を殺すという心理的抵抗感の有るものすら引きおこすというものだ。それと、おそらく麻薬のドーピングと同原理で、筋力が上昇することが発病と同時に確認されているため、筋力も上昇すると考えられる。

離見沢村の住人は、誰もが感染しており寄生虫だが転居してきた少年にも感染する性質をもつていたために感染してしまったのだ。こ

の病気の発病は、5段階に分けられておりレベル5という状態にさえならなければ人を殺すことはなく日常生活を普通に行つていけるレベルだ。

だが、この少年は発病条件を満たしていた。それは、ハルケギニアへの召喚とルイズの暴行行為によるものである。

この病気を引き起こす寄生虫も真性社会生物といってアリのように女王の統制を受けており、女王の統制を受けることの出来ない遠隔地へと行くことで発病しやすい状態になつてしまつ。また、周囲からストレス環境にさらされるといった精神的なものも条件であり、事実ほかの感染者で暴行行為を受けていたことが元で発病している人間もいる。

これら二つの条件を満たすといつ運の悪さによりルイズは、殺されてしまったのだった。

しかし、問題はルイズが殺されたことにはとどまらないかもしれない。なぜならその病気が感染するならば、少年が学園で接触した人物に感染しているのかもしれないのだから。

ひぐらしのなくごろにより「前原圭一」を召喚。

## 番外編 最悪の少年（後書き）

ひぐらしネタで羽入の召喚を考えていたら思い付いたので投稿していました。気に入らなかつたら、すいません。

4/26 追記  
難見沢症候群による筋力上昇といつのは、原作で前原恵一が発症したために隔離しようとした入江研究機関の人間を成人男性で有るのにもかかわらずてこづらせていたのを見て思いつきました。

## 番外編 その後のトリステイン魔法学園（前書き）

その後のトリステイン魔法学園を描いた作品です。内容的におかしいところもあるかもしれませんがない容赦を。

トリステイン魔法学園は、衝撃からさめやまなかつた。トリステイン魔法学園に通うルイズが、自身が召喚した平民の使い魔に殺されたという前代未聞の事態が起きてしまつたからだ。獵奇的な手口も影響していたのだろう。

生徒や教師は、偽善かもしけないがさすがに殺されるなどということは望んでいなため殺されたことに、マルト など学園勤めの平民は少年の変貌や厨房の管理体制が甘かつたのではないかということに衝撃を受けていた。

しかし、どのような事態でも人は慣れるものだ。ルイズの死からしばらく経つてから、日常が繰り返されようとしていた。とはいそれは決定的に以前とは異なつていた。

脳内に爆弾を抱えているのだから。

トリステイン魔法学園内では、生徒間の不和が広がつていた。以前は仲の良い友人が 取り巻きを含めるかは別として 突然 口論に発展したり完全に関係が修復不可能なものにまでなつてしまふのだ。

それだけでない。貴族として禁止されている決闘のような形ならばともかく魔法を使わずに相手を（殴るなど暴行行為を行うこともあらうのだ。

これらは、離見沢症候群に基づいている。この病気でも段階に分かれているため人殺しや暴行行為を行うレベルでなくともある程度相手に対する凶暴性がましてしまうためだ。

子供といえども貴族である。これが大人であるなら貴族であつても政治的な判断で相手を辱しめるようなことをする人間は滅多にいなが、プライドの高さばかりがこの年代には目立つてゐる。高圧的な態度を取られることによつてある程度発現したのだろう。

全ての生徒が同じ行動をとるわけではないといえこの皺寄せは、オスマンをひょうなく襲うことになる。オスマンは、学園の最高責任者であり、場合によつて外国の生徒も通つてくるため学園内での問題が戦争に発展したこともあるのだ。

それだけでなく貴族としてのふさわしい立ち居振舞いを教えるというのも学園の役目だ。学園内での状況の悪化に伴い、オスマンに対する批判は対応能力がないと強まつていた。ルイズの死とこれを利用して、学園長の管理不行き届きとして貴族社会での権力闘争に打ち勝ち学園長の座を勝ち取ろうという意図もあるだろう。とはいっても、オスマンもそれなりに政治力を持っていたがため、長々思うようにはいっていなかつた。

その状況は激変する事態が起きてしまつ。それは、クンデンホルフ大公国の大公国公女ベアトリスに対する暴行事件だった。

クンデンホルフ大公国は、大公国というなの通りトリスティンを宗主と仰ぐ国家であるが実質は一つの独立国であり経済支援も行つている。

そのためベアトリスは、そのことを鼻にかけていたためにベアトリスの取り巻きが彼女の態度が原因で暴行行為を働くことになつてしまつ。

幸いにも　　本人には別だが　　致命傷ではないし一生涯他人の世話なしではいきられない寝たきり生活を送るものではなかつたが、それでもかなり酷い怪我を負つたのは事実だ。

クンデンホルフとの外交問題を恐れたトリスティンは問題の生徒をクンデンホルフへの迅速な引き渡しを行い、それと同時にスケープゴートとして学園の権力者であるオスマンを解雇するといった措置を行うことになる。

オスマンが失脚した後に彼の後がまを狙つていた人物が就くことになるが、その人物に変わってからも学園の状況が悪いことに変わりはなかつた。

生徒を中心に描いたが、教師や学園勤めの平民でも同じことが起きていた。

そして、その内こんな噂が流れ始めた。それは、使い魔として召喚され処刑された平民の祟りで無理矢理操られているのではないかといつものだった。

そんな噂は馬鹿馬鹿しいのだが、事実として召喚された平民が現れてからこのような事態が起こったのは反論しようのない事実だった。こんな噂が流れるようになつても名門校であるために潰れることはなかつたが、その後も暴行事件は起こり、場合によつては凄惨な殺人事件が起ることになるのだった。

## 番外編 その後のトリステイン魔法学園（後書き）

トリステイン魔法学園は、雑見沢症候群の軽度の発症で不仲になり暴行事件や殺人事件の起こりやすい環境に変貌したという設定です。

雑見沢村でも全て殺人をおこすわけでないですし。

## アナザーチルドレン（前書き）

今回で別で執筆させてこらの人に集中したいなど最後とされたいた  
だきます。

## アナザーチルドレン

東京都の一角に位置する住宅街。普段は、静かな住宅街なのだが今は違っていた。

住宅街とその一帯は、徹底的に封鎖され近隣にも通行規制が全面的にわたり行われていた。

そしてその住宅街には、おびただしい数の車両が出入りしていた。科学調査用の機材を満載した特殊車両や軍用の装甲車といったチグハグな組み合わせだが、それでもこんな住宅街には本來来るはずがないのだ。

それらの車両は、自衛隊にも警察機構にも属していない。属しているのは、内務省超能力支援研究局B A B E Lだつた。

この物々しい体制は、超能力が国家に対し影響力を与えるようになつた世界で最重要ともいえるレベル7エスパー、チーム名ザ・チルドレンの拉致に対する調査だ。

「うおおー、儂の可愛いチルドレンはどうなつたんだー！もしチルドレンが酷い目にでもあつたらー！」

B A B E Lの指揮通信車両として位置するトレー・ラーの中で一人の猛獣・・・いや猛獣とも思われかねない迫力で巨漢のB A B E L局長桐壺帝三が暴れまくつっていた。ザ・チルドレンを思うが故ながら、高価な通信用の機材や周囲の人間への迷惑を考えてほしいものだ。

「きよ、局長。落ち着いてください、落ち着いて。」

この惨状を見かねたザ・チルドレンの現場主任の皆本光一があわてて止めに入る。

「そういうがね、皆本クン、チルドレンはレベル7のエスパーだ。どんな目にあつていいかわからないんだぞ。」

ザ・チルドレンは、小学生で構成されているがエスパーが軍事・経済・政治に対して影響力を持つているレベル7のエスパーである彼女たちの価値は計り知れない。わざわざ拉致したのだから、チルドレンの力を利用しようとするのが目的なのだろう。桐壺局長は欠点こそあるが、エスパーとノーマルの共存を望んでいる人物でありチルドレンを純粋に心配しているのだ。

「だからこそです、局長。」うつたときにはこそ冷静でないといけません。」

「確かにそうだね、皆本クン。もう一度チルドレンの拉致された状況を教えてくれないか?」

その問いに皆本は、その状況について再度説明を始める。チルドレンの現場主任であるならもう少し感情的なそぶりを見せてもいいのだが、まるで感情がないかのように冷静だ。だが、それはチルドレンを思うからこそだ。

B A B E Lは、超能力の研究や超能力を持つ人間の保護を行つている。しかし、それだけでなく超能力を利用することによって救助や超能力犯罪の防止を行つている。皆本とチルドレンがこの住宅街を訪れたのも、超能力を利用した救助活動の一環、いや事故の防止だった。

B A B E Lの予知部と呼ばれる未来予知能力者によって未来を予知する部門があり、この未来予知に従い事故や犯罪の防止を行つている。もちろん100%ではないがそれでも耳を貸す価値はあるものだった。

その予知部がこの住宅街でトラックの暴走事故がかなりの高確率で起こると予知を行い、その予知の防止にB A B E Lは乗り出しだが通常の交通封鎖などの手段をとる時間的猶予はなかった。なぜなら事件の発生まで10～20分程度しかなかつたからだ。

B A B E Lは予知の防止ができないのではないかと考えたが、その

住宅街の近くにはたまたま休暇中のチルドレンが近隣にいた。その事実に気づいたB A B E Lは、素早くチルドレンに指示をだし、その指示を受けたチルドレンはE S P リミッターを解除したうえで野上葵のテレポートにより現場へと急行した。

だが、結局は予知部の予知ミスであつたことが判明する。予知時間になつても何の問題はおこらなかつたし、それ以前に三宮紫穂のサイコメトリーによる広域探査の結果トラックが存在しないことが判明したのだ。

何の問題も起こらないと安心したチルドレンは、休暇に戻ろうとしたのだがその時皆本の田の前で鏡のようなものがチルドレンを飲み込みチルドレンが消え去つてしまつたのだ。

「問題の鏡のようなものは、テレポーテーターあるいは何らかの合成能力と考へるべきかね？」

話を聞き終えた桐壺が対策を考えるために質問を行つ。

「ええ、おそらくそう考へて問題ないでしょ。出なければ人間を遠隔地へと連れ去ることは不可能です。機材による空間歪曲も確認されています。ですが、機材による空間歪曲場の追跡はかなり難しいので無事に追跡できるかは分かりません。」

「テレポーテーターをこちらも手配してはいるんだが、レベルの低い空間歪曲は起こらないため難航しているよ。頼みの蓄管理官は、この状況でも寝ているしね。」

テレポーテーターが確認されてから機材でも空間歪曲をとらえられるようになつたが、それはテレポーテーターの空間認識とくれば月とすっぽんのレベルに過ぎない。空間移動を行うのに必要な計算を完全に無意識下の領域にほとんど任せ行きたいと思つたところにいけるのだから。

テレポートを介した誘拐に対しては、テレポーテーターによる追跡が最も有効だが残念なことにテレポーテーターは高レベル能力者の絶対数の不足がネックだつた。おまけに蓄管理官というすぐに手に入る

高レベルのテレポーテーターはいつものことだが、ぐうすか眠っているという始末だった。

「それなら今回の犯行を行える高レベルエスパーか組織を探るべきでは？」

「それもやつているよ。とはいえたど全て知つていてるわけではない。他国のエスパーや近年目覚めたエスパーなど知らない者もいるだろう。組織としてはPANDRAか他国だろうがね。」

「兵部は確かにチルドレンの確保を狙つていますが、擁護するわけではありませんが幾ら奴でもこんな手段をとりはしないでしょう。超能力者の解放というのは本当の事のようですし、何よりチルドレンの意思を尊重しています。」

皆本と桐壺がああでもないこうでもないといつている中、指揮トレーラーの中に慌ててBABEーの職員が入ってくる。

「大変です、チルドレンが現れました。」

その知らせを受けた二人は、職員を突き飛ばすかのようして慌てて外へと向かう。そこには、確かに指揮トレーラーから離れているところにチルドレンの姿があつた。

「おお、無事だつたのか。いつたいこれはどういうことなのかね？」

「君たち、どこへ連れ去られていたのか分かるか？」

皆本と桐壺は、チルドレンへ駆け寄ると今回の事態についての報告を彼女たちから求める。チルドレンが帰つてきてうれしいのは、事実だがだからといって仕事を放棄するわけにはいかないのだ。

そしてチルドレンから語られるのは、魔法と呼ばれる能力を使える異世界勢力に偶発的に拉致されたというものだつた。本来ならそんな話は、信じられないのだがセンサーが念波という超能力者特有の能波と違うエネルギーを拉致現場で捉えたことやチルドレンが嘘についているように見えなかつたこと、さらにサイコメトリーの手による調査の結果それが事実であることが判明した。

その異世界は、おそらくパラレルワールドか別の惑星だと思われたが事故とはいえ空間転移による拉致が行われたためにその情報は政

府に機密指定されたのだった。

## アナザーチルドレン（後書き）

内容的にグダグダだったかもしれませんのが申し訳ありません。  
今までありがとうございました。

## 番外編 役立たずのガンダールヴ

そこに地球で生まれ育った人間がいたらそのアンバランスさに驚いたかもしない。その草原では、10代の少年がその体躯にふさわしくないアンチマテリアルライフル、対装甲破壊を前提にし装甲車両を破壊し人体をぐちゃぐちゃの肉塊に変えてしまう威力を持つ武器を構えていた。これだけなら少年兵ということもあるので奇異に思わないかもしない。

だが、その少年がアンチマテリアルライフルを発射しようとする目標を見れば目を見張るだろう。

なぜなら、地響きを立てるほどの大的巨大なゴーレムという土でできた人形なのだから。

ここは、地球ではない。ハルケギニアと呼ばれるパラレルワールドか別の惑星のどちらかに位置する地球に属さない一地方だ。この少年は、使い魔召喚というハルケギニアに存在する魔法により地球から使い魔として召喚され彼を召喚した少女ルイズのもとで使い魔として従つている。

最も楽天的な性格の彼でなければ従おうなどとは思わないだろうし好意など抱こうとはしない過酷な扱いなのだが。

そして彼は、いまハルケギニアを騒がせている怪盗土くれフーケに盗まれたトリステイン魔法学園の秘宝、破壊の杖の確保にあたつている。

そして破壊の杖の確保に向かつた際に土くれのフーケのゴーレムにより襲撃を受け、再生能力を土を利用することで持つていたがために同行していた人物の魔法攻撃を使つても倒すことは叶わなかつた。起死回生の策としてなぜあるのかはわからないが、地球勢のアンチマテリアルライフルを使って攻撃しようとしているのだ。

少年には、ガンダールヴという魔法をもたらした始祖ブリミルの使い魔であるあらゆる武器を操る能力を備えた力が宿つており、アン

チマテリアルライフルを利用することができるはずだつた。

「いよいよ、少年が発射し、弾丸がゴーレムを襲つ・・・わなかつた。

そう何故か弾丸は発射されなかつたのだ。

「逃げろー、逃げるんだ。」

「そう叫びながら少年を筆頭に「ちょっと、貴族たるもの敵に後ろを見せるんぢやないわよ。」と言いながら彼の主人と同行していた二人の少女も命からがわ逃げていた。

なぜ、銃弾が発射されなかつたのか？それは、このアンチマテリアルライフルがSOPというシステムに対応していたからである。SOPとは、ナノマシンによる武器の認証システムでありこれにより敵に武器の奪取を防ぐ、兵士の略奪行為を防ぐことを目的にしておりガンダールヴでもこの認証システムにより使うことはできなかつたのだ。

ガンダールヴで武器の操れるといつてもそれはしょせん武器の使い方がわかるサイコメトリングのような読み取り能力の類であり武器を強制的に支配するといった能力ではないし、武器の使い方は分かっても武器の構造は分からぬいためにSOPというシステムに気づきはしなかつた。

ちなみに少年は、地球出身者でSOPシステムのある世界の出ながら専守防衛など出身国日本のお国柄がもとでSOPというシステムの存在を知つてはいなかつた。

少年たちは、命からがら逃走に成功したが、姿を急に現さなくなつたためにミス・ロングビルというオスマン学園長の秘書がふーけであると特定されたが、馬鹿にされることになるのだった。

MGSシリーズよりSOPシステム対応のアンチマテリアルライフルを召喚。

## 番外編 役立たずのガンダールヴ（後書き）

ガンダールヴのローンの扱いへ疑問があつたためにこんな展開にしてみました。  
オスマンがワイバーンに襲われ助けられたのは、SOPを導入するため近年です。

トリステイン魔法学園。そこで春の使い魔召還が行われていたが生徒達は呆然としていた。事の発端は、魔法が使えないためにゼロと呼ばれる少女ルイズが使い魔をやつと召還したことだった。

それ自体は喜ばしいことなのだが、召還した対象が問題だった。それは、人間だった。それも平民ではなく騎士だった。男性ではなく自分達と同年代くらいの可憐という言葉が似合つ少女だったが、かなり整った鎧冑をつけているところをみると騎士なのだろう。平民の洋平では剣と合わせて整えられる装備ではない。

貴族を使い魔にしたとなれば外交問題となるかもしれないのだ。

「ミスター・コルベール、私はどうしたらいいんですか？」今にも泣きじやくりそうな聲音でルイズがコルベールに尋ねる。進級にも関わっているのだ。

「いや、待ちたまえミス・ヴァリエール。彼女は杖を持つてない、なら平民だ。それなら契約しまえ。」

この世界では魔法を使用するメイジは杖を必要としそのメイジは貴族の象徴として杖をほとんど放さない。それがないなら貴族ではないのだ。

剣型の杖もあるにはあるがあれはどう見てもただの剣であつて杖ではありえない。それを聞き安心して契約を果たそうとするルイズ。しかし、この世界のメイジが魔力を感知することができないだけで彼女とその剣からは膨大な魔力が溢れているのだが。水メイジが水の魔力を探知できるというのも水が代謝反応など生命活動を行ううえで重要な働きをするのでおそらくそれを介して治療を行つたりするために体内の水を感知できるだけで純粋な魔力感知ではないだろう。

召還された少女は混乱していた。いきなり見知らぬ場所へ飛ばされてきたのだ、それも少女が行つた世界との契約によるものではない。

魔術師による空間転移かとも思えたが、魔術師にしてはそこまで悪辣な感じはせず状況確保に努めようとしたのだが

いきなりピンクブロンドの少女にキスされてしまっていた。何をと思つまもなくキスされたが、キスをされたことよりも次の瞬間には驚きを感じていた。

精神が魔力によって侵食されている。どうやらこれは口腔内を通すことによって精神を改変する術式の一種らしく、おそらくキスをしたのもそれが元だろう。

精神を改変されてたまるかと少女は必死に魔力を使ってレジストしようとしたのだが、突然のこともあって使い魔のルーンを書き込まれてしまった。

使い魔のルーンが書き込まれたのを見て無事に使い魔ができたとルイスは喜びを思えていた。が、その思いはすぐに死の恐怖へ変わつてしまつた。

誰も捉えることができなかつた神速ともいえる速度と圧倒的な殺氣と共に首筋につけられた剣によつて。通常なら使い魔のルーンをつけられた生物は主人に従うことはしない。これは精神が改変されたためだつた。

少女が恐れていたのも精神が無理やり改変されることだつたが、その少女の心は強い。ルーンによる精神改変でも御しきれないほどに。「やめさない。こるバールが叫ぶが、それに「彼女の命をとることは私も騎士としてどううとは思いたくない。だが、ここがどこで何をしていたのか答えなければ命の保証はしない。」と詰めたい声が少女から帰つてきた。

彼女の身の危険、いやこの場にいる自分をも含めた全員の身の危険を感じたコルベールはそのまま彼女に説明を始めた。

「ここは、全くの異界かどこかのようですね。それでは、帰る方法とこれを解除する方法は。

説明を聞き終えた少女は尋ねるが、そんな方法は誰も知らない。

「帰る方法などありません、これは本当です。使い魔は一生従つも

のなんです。それにルーンを解除するには死ぬしかありません。」  
コルベールは必死の思いで答える。これは事実だが彼女の逆鱗に触れたらどうなるか分かりはしなかつた。

嘘をついてないと人物を鑑定するのに優れた才を持っている少女は判断したが、大人しく使い魔になる道を選ぼうとはしなかつた。

「そうですか、それでは死ぬしかありませんね。」

「ちょ、やめさないよ。」今まで恐怖ですくんでいたルイズが制止のために叫んだが、その声は虚しく少女は心の臓へと剣を突きつけた。

怖くは無かつた。普通の人間なら追い詰められない限り死のうとはしないだろうが、大規模な戦闘で何度も死の恐怖は味わっているし元より少女は死んでいる身だつた。

ある国の王として民のために戦つたが、反乱がその国で起きてしまった少女はカムランの丘という丘で死に瀕していた。死に瀕していた少女は自分の国や民が傷つくを恐れが何もできないという無力に行く身であつたためにさいなまれていた。

そんな少女に希望が現れた。世界には世界の意思という意思がありその意思が自らに話しかけ英靈という高位存在にならないかと話しかけてきたのだった。これを希望として彼女はすがりつき、民のために万能の釜といわれる願いを叶える聖杯を手に入れてから英靈になる代わりに世界にその手伝いをするよう持ちかけたのだった。世界はそれに応え契約として彼女は聖杯を求める戦いに死亡する前の状態に戻つた上で時空さえも超越し無限とも言える戦いに参加していた。聖杯を手に入れ民のために反乱によつて自身の死を防ぐために。

この少女が戦つてきたのはひとえに国のため、民のためだった。その思いが果たせなければ自分が大量の犠牲を出した上で行つてきたことへの意味が無いのだ。

死んだとしても構わなかつた、もしこの世界にも自分のいた世界の意思が届くのならばカムランの丘に戻り聖杯を求める戦いに参加で

きるのかもしないのだから。

そして少女の意思は天に通じたのか、少女の死と同時に世界の意志が働きカムランの丘へと彼女は戻っていた。

後には死体が無いことに再び呆然とするルイズたちが取り残されていた。

Fate本編開始以前よりセイバーこと「アルトリア・ペンドラゴン」を召還。

## 番外編 将軍の使い魔（前書き）

今回は今までの作品とかなり異なる展開です。アンチ物みたいにハルケギニア占領などもあるため苦手な人はやめてください。長いです。

遠い昔遙か彼方の銀河で・・・・・・銀河共和国とドゥークー伯爵率いるCIS（独立星系連合）の戦いは激化の一途をたどつていた。とそれは置いといてクローン大戦を描いたアニメでも描かれていない一つの事件がこれから描かれる。

漆黒の宇宙空間。そこでは宇宙の静寂を搖るがし、戦闘が行われていた。銀河共和国と独立星系連合の双方の艦隊が砲火を交えているのだ。宇宙空間を高出力のビームが切り裂き、シールドに守られているが船体をビームが搖るがしまるで地震のような震動を与えてくる。

戦っている艦隊のうち優勢なのは独立星系連合の艦隊だった。共和国側は艦隊といつても補給を目的としている艦隊でしかない。護衛は付いているがそれらは駆逐艦程度でしかなくプロヴィデンス級／キヤリアー／デストロイヤーで構成された艦隊の前では意味がない。4・8メガトンという莫大な熱エネルギーのレーザー兵器を初め非常に強力な兵器を備えているのだから。

これが虎の子のスター・デストロイヤーならば別かもしぬが戦争の激化に伴いクリストフシスの戦いといった重要な戦いを除きスター・デストロイヤーが護衛として投入される回数は少なくなっている。会戦は独立星系連合の圧倒的なまでの勝利に終わり、共和国軍の艦隊が残骸として辺りを飛び散っていた。その艦隊の旗艦である一石の改造の施されたプロヴィデンス級／キヤリアー／デストロイヤー／インヴィジブル・ハンドのブリッジでは一人の將軍がイライラとしてブリッジをうろつき回っていた。その体は有機体の体ではなく白銀に輝く奇怪なともいえるサイボーグの体だった。元々は生身の体だったがシャトルの事故、実際はサン・ヒルという独立星系連合の幹部によつて総指揮官になるよう仕組まれていた謀略によつてカリーシュという自分本来の種族の姿からサイボーグのボディーへ

と変わっていた。生身の体はわずかしか残つておらず脳さえも解像を施されている。

だが変わったのはその精神だった。自分達に忠実な手<sup>シ</sup>として残虐な精神へと変貌させていたのだった。

「ええい、この程度では話にならん。もつと歯<sup>シ</sup>たえのある相手はないのか。」好戦的な思考の持ち主である彼からすれば補給艦隊を襲うという戦術上の重要性は理解できてももつと大規模な戦闘行為を求めるという欠点があつた。二モイディアンやドロイドの乗組員は八つ当たりに巻き込まれないよう戦々恐々としてしていたのだが、その懸念は無くなつた。

「な、何だこれは！」という叫びと共に将軍が乗組員の目の前で鏡に呑み込まれることによって。

トリステイン魔法学園では、春の使い魔召還の儀式が行われていた。その生徒の一人ルイズは使い魔の召還に成功していなかつたが、ひときわ激しい爆音と煙が晴れるとそこには自身の使い魔がいた。そこにいたのは、見たこともない亜人だつた。他の生徒と違ひ幻獣でないことに失望を覚えていたが、その亜人の外観が強いと思つたルイズは嬉々として契約を行つた。

ところが、使い魔のルーンは刻まれなかつた。その将軍は前述したように人体のほとんどを改造したサイボーグである。サイボーグであつても有機体が残つていれば別かもしけないが過剰なサイボーグである彼にルーンが刻まれるはずが無かつた。

契約がうまくいかなかつたことにルイズは失意を覚え一時的に心神喪失状態に立たされていたが、「く、苦しい、やめさないよ。息が。

」と万力のような力で将軍に首をつかまれ叫んでしまつた。

「ここは、何処だ。そしてわしになにをしようとしていた。答える。

「」「ここは、ハルケギニアのトリステイン王国よ。あんたは私が使い魔として召還したのよ、大人しく従いなさい。」

首をつかまれているにもかかわらず高圧的な言い方をするルイズ。

だが、それはまずかった。プライドの高く残虐な性格の人物にその言いはまずいのだ。

「ふん、トリステイン王国だと。どんな手を使つたかは知らんが辺境惑星の人間が何らかの手段でわしを拉致し奴隸にでもしようとうのか。ふざけるな。」

そういうながらますます首をつかむ力を強める将軍。ルイズも必死に苦戦の表情を浮かべ息を求めるがサイボーグボディーの彼に生身の彼女が張り合えるわけもなくそのままボギつという嫌な音を浮かべながら事前に投げつけられた。頭が安定していないところを見ると、首の骨を完全に粉碎されてしまったのだろう。

それを見て死の恐怖に駆られてしまう生徒達。ここで逃げて置けばよかつたのかもしれない。だが、元々貴族である彼らはメイジとしてのプライドが高い。そのため彼らは銀河全域で恐れられる将軍相手に攻撃を加えるという愚公を犯してしまった。

「亞人風情がメイジを殺したな。」

「役立たずのゼロを殺したからつていい氣になるな。」

そう各自叫びながら魔法を行使する。風の刃が踊りくる、炎がもえたぎり将軍の体を目指して殺到した。だが、それは全て将軍に見切られ回避された。

全く未知の攻撃であることは確かだが、だからといって反応速度から回避できないことはない。フォースこそ使えないがジェダイやダーケ・ジェダイという常人越えした身体能力を持つ相手と張り合えるだけの圧倒的な能力を持ち多数の共和国軍のクローントルーパーさえ渡り合えるだけの戦闘能力を持っているのだ。亞光速のプラスターさえも見切る彼からすれば音速のミサイルよりも劣る魔法を回避するのはたやすい。

魔法を回避されたことに衝撃を生徒達は感じたが魔法の優位性を盲目的に教えられた生徒達はなおも攻撃を行うがそれらはことごとく回避されてしまう。

「このわしと張り合おうといふのか。愚かな、格の違いを見せてや

ろう。」

そういうながら一本の腕に素早く掴み取つた光刃を起動させ、跳躍し生徒達の面前へと降り立つた。そこから先は一方的な虐殺だった。銃でさえも0・5秒引き金を引く間がありそれを利用して距離さえつめれば撃退することもできるのだ。

呪文の詠唱を必要とする魔法ならなおさらだ。将軍の振るう光刃、ライトセイバーを突きつけられ炭化したり打撃で内臓に致命傷をうなどして生徒達や引率のコルベールという教師も応戦してきたが生徒達は短期間に倒されてしまった。使い魔となつた幻獣も応戦してきたが遙かに獰猛な生物のいる銀河系で暮らしてきた彼にとつて敵ではなく、強固とされた皮膚もライトセイバーには耐え切れず倒されていた。ルーンが解除されたので逃亡するものもいる始末だった。

生徒達を倒すと何らかの施設があるため増援が来る前に将軍はその場を立ち去つた。生徒達がなかなか戻つてこないのを不審に思った教師によつてしばらくしてから凄惨な死体が見つけられ、使い魔の召還の儀式を行つていたために召還した使い魔によつてこの事態が引き起こされ斗判断された。その後危険な何かを探すために数週間がかりの捜索が行われたが、その何かは見つからなかつた。とはいえてこれで幕引きとはならなかつた。

その数週間の間に呆然としていたが何らかの手段で将軍を拉致されたと判断した独立星系連合は、優秀な戦術家であるのと軍事的な象徴であるために救助のための調査活動を行つた。拉致した鏡のようなものは、センサーによると失われた極小のハイパースペースを形成するものであることが分かり、位置の特定に成功した独立星系連合は将軍救助のためハイパースペース発信源である辺境宙域の惑星ヘブロヴィデンス級／キャリアー／デストロイヤー／ヤルクレハルク級戦艦を初めとする艦隊を派遣した。実際はそんなことはないのだが極小のハイパースペース形成技術を持つ勢力であるなら自分達より上の技術を持つていもおかしくないためだった。

その惑星の軌道上に立ち地上へのスキヤンを行つたが自分達の懸念としていたような高エネルギー反応を検地することはできないために技術・科学スタッフを悩ませたがコムリンクによつて將軍の救助に成功した。

その將軍の口によつてフォースとも違つ魔法と呼ばれる能力の存在が明らかにされたが、その存在がその辺境惑星に銀河の動乱を巻き込むことになるのだった。

將軍は自身を奴隸化しようとした復讐のために魔法の分析と辺境惑星であるために表沙汰にできない人体実験やそれ以外にも資源確保を前提にドゥークー伯爵を初めとする上層部へと働きかけた。

ラカタン星間帝国の滅亡と同時に失われた極小のハイパースペース形成技術があるためにその惑星のハルケギニアをも含む全土の制圧が決定され、独立星系連合の支配下に魔法のあるハルケギニアも魔法のないハルケギニア以外の地域もおかれてしまった。その過程でハルケギニアではメイジの絶対数が減少し、精緻にある世界扉は研究対象として興味深いが不安定であるために軌道上からの砲撃によつてエルフという種族の犠牲と共になくなり、それ以外の地域でも大規模な戦闘が巻き起こつた。

これ以後、この惑星は支配下に置かれたが銀河共和国の監視網にかかりたため激しい戦いだったとはいえ銀河共和国側が勝利し独立星系連合はこの惑星から撤退した。

銀河系との関わりができるためにメイジの減少と銀河系から様々な異星種族がこの惑星に来たことによつてハルケギニアはメイジ支配からは結果的に解放されたのだった。

銀河帝国の統治下や銀河帝国の崩壊以後も銀河の歴史のピースの一つにその惑星は含まれるのだった。

## 番外編 将軍の使い魔（後書き）

スターウォーズ好きなんで暴走してしまいました。スターウォーズの設定は公式とスピノフからの設定です。

番外編 狂信者の使い魔（前書き）

今回はかなりグロいでしす。前話と同じで原作キャラの大量死が凄惨に描かれています。

死体、死体、死体。太陽は穏やかな日差しを差し、そよ風が心地よく吹くという牧歌的な雰囲気に包まれた野原は、今ではまるで怨念に包まれているかのような雰囲気だ。

下草は鮮血に覆われその身を化粧し、その上に死体が横たわっている。

いや死体といつてどうかもわからない。完全に原形を止めず、見た  
ら最悪は精神が崩壊したり最低でも悪夢にうなされるだろう。

頭部が完全にぐちゃぐちゃにされ脳の中身がぶちまけられているも  
の、体が強い力で真っ二つに引き裂かれ臓物がドロリと垂れてるも  
の、眼球が陥没しているもの、腹を切り裂かれて未だに生きている  
がまもなく死ぬであろう内蔵や筋肉、骨が丸出しになつてるもの・  
・

そんな悪魔が暴れまわったとしかいいようのない凄惨な場所でも一  
人の少女は生き残つていたが、その顔に生氣はなかつた。普段は活  
発で男を魅了する顔も能面のようになり恐怖のあまり黄色い液体を  
出すという粗相を犯している。

（ハハハ、みんなしんじやつた。タバサもルイズもコルベ ルせん  
せいも、みんなみんなしんじやつた。ハハハ、アハハハ。）

そして恐怖に耐えきれなかつた少女キュルケ・アウグスタ・フォン・  
フレデリカ・アンハルツ・ツェルプスト の思考は狂気に歪んでい  
た。その思考は狂人のものだ。

そんな頭でもなんでこんなことになつたのかを振り返らうとしていた。

原因は、使い魔の召喚だつた。何処か憎んでいながら親愛の情とで  
もいうものを感じていたルイズの使い魔、いや死んだのだし逆らつ  
たのだから使い魔とはいえないのかも、とにかく彼女の召喚したも  
のが原因だつた。

その日ルイズは何回かの失敗の後遂に使い魔を召喚できたのだけど、その使い魔が問題だつた。見慣れないけれど神父の格好をしていてブリミル教と対立するかもしれないからだ。しかし話を聞くと格好が似かよつてゐるだけのキリストという教えらしく異端という問題はあるものの契約を施そうとしていた。その時だつた、今まで柔軟な顔をしていたその神父が誰もがいやすくめられるような凶暴かつ残忍、冷酷非常で狂信的な顔立ちに変貌したのは。

「我らの神の教えに逆らうものに従うだと！－エイメエエエエン、神の教えに逆らう化け物に神の鉄槌をおお！－」とその顔に変貌してから叫ぶと一方的な虐殺が始まつたのは。

まず近くにいたルイズとコルベルが形容しがたい方法で殺され、次は生徒だつた。メイジであることなどなんの役にも立たず次から次へと惨殺され、魔法や使い魔の攻撃にさえも平然としていた。いや攻撃を食らつても不思議なことに次には治つていた。

逃げようとしたものも逃げようとした次の瞬間には殺されそして血みどろの死体の中に一人たたずむ状況になつていて。その彼女も無事ではない。血にまみれた神父が、近づいてくると永久に意識を行つていた。

「ふん、死んだか。アカドに比べたらどれも雑魚とはいえもう少し歯応えがないと面白くもない。まあいい次はあの建物の中に入る異教徒の化け物を殺してやるだけだ。」

一片の命への思いやりを見せない声でいうとキリスト教の歪んだ思ひの終結、異教徒や世間一般に信じられない吸血鬼を狩るバチカン法王庁13課イスカリオテ機関の神父はトリステイン魔法学園に歩みを進めた。

聖堂騎士、殺し屋、天使の塵、<sup>エンジェルダスト</sup>再生者（リジエネレタ）、首切り判治の異名を持つ男から逃れられるものはいない。ヘルシングより「アンデルセン神父」を召喚。

番外編 海賊の使い魔（前書き）

今回は予告編ティリストです。

## 番外編 海賊の使い魔

異次元レ・ス。それは宇宙進出さえ可能にした世界の地球で行われるはずだつたレ・ス。

異次元を旅するそのレ・スは、大会出資者に不満を抱いた男ジェイソンによって妨害された。

がジェイソンと巻き込まれた宇宙海賊コブラは次元を介した追跡劇を繰り広げるのだった。

そしてそれはハルゲギニアにまで及んだ。

「魔法だつて、また厄介なのが出てきやがつた。」  
魔法と対峙する不死身の男コブラ。

「コブラ、俺とを組め。この世界を手にいれることも可能だぞ。」  
野望のために策謀を始める男ジェイソン。

「ウサギ・・・そのカラクリを手にいれれば世界扉よりも異世界への移動が容易になります。」  
ブリミルの教えのために異世界への進出を。

「異世界進出、狂信的理想をたてに動くビットリオ。

「ジェイソン、奴を動かせばこの腐つたハルゲギニアを滅ぼせるわ、  
フハハハ。」

ハルゲギニア滅亡に動くジョゼフ。

様々な思惑が交錯するなか、コブラはハルゲギニアに行く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1199r/>

---

逃走する使い魔達

2011年10月7日03時08分発行